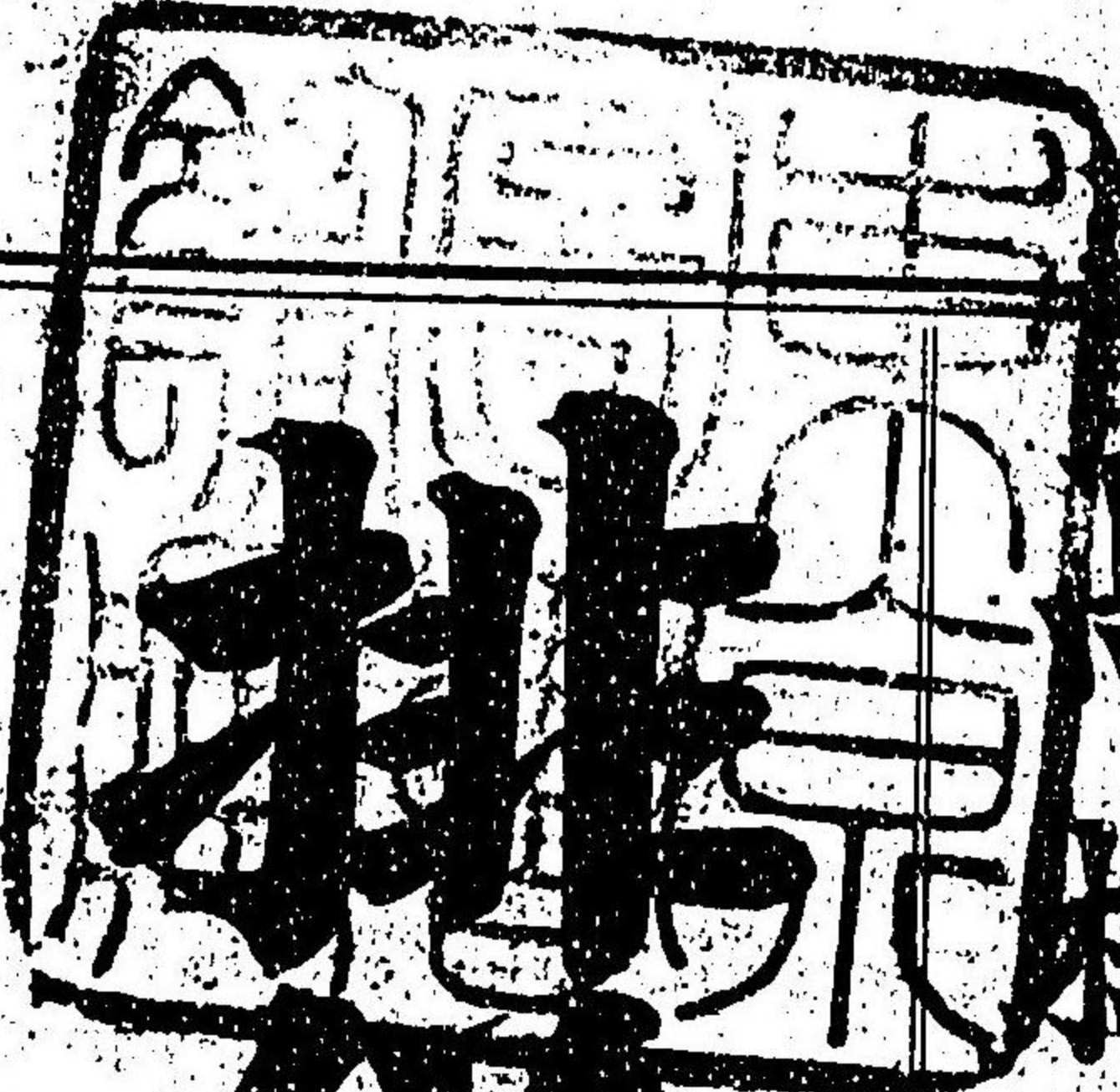


高橋五郎著

排偽哲學論

東京 民友社出版



MOTTO'S :

Opinionum commenta delet dies, naturae judicia confirmat.

CICERO, De Natura Deorum.

The propitious smiles of Heaven can never be expected on a nation that disregards the eternal rules of order, which Heaven itself has ordained. \* \* \* Of all the dispositions and habits that lead to political prosperity, religion and morality are indispensable supports. In vain would that man claim the tribute of patriotism, who should labor to subvert these great pillars of human happiness, these firm props of the duties of men and of citizens. The mere politician, equally with the pious man, ought to respect and cherish them.

GEORGE WASHINGTON, Farewell Address.

Our ancestors founded their system of government on morality, and religious sentiment. Moral habits, they believed, cannot be trusted on any other foundation than religious principle; nor any government be secure, which is not supported by moral habits. Whatever makes men good Christians, makes them good citizens. Our fathers came here to enjoy their religion free and unmolested; and at the end of two centuries, there is nothing upon which we can pronounce more confidently, than the inestimable importance of that religion to man, both in regard to his life, and that which is to come.

WEBSTER, Plymouth Dis., 1820.

FACTA, NON VERBA!

排偽哲學論序

人を不孝不忠不義の大罪人と讒誣するは決して輕き事にあらず、井上哲次郎博士の「教育と宗教の衝突」は傍若無人の言辭を以て此の誣告を輿論の法庭になせり、此點に於て該書は十分に辨難駁倒せられざる可らず、然れども井上氏の所論を余が偽哲學として排斥するには尙他に理由の在るあり、井上氏は歸朝後我が大學に在て比較宗教を講じされりと云ふ、而して其之を講ずる様は佛教新聞「國教」に於て嘖々稱道する如く、

因果妙機評釋氏

神化怪說排耶穌

に在りと云ふ、是れ井上氏は或る宗教の機關として大學校内に比較宗教を講じつゝある也、然るに彼が常識だも無くして到底

二  
ヘーゲルが言へる如き深遠高妙の問題を辨へ得ざることは余輩  
二三の例を衆多の例中より擧げて本論に之を明らかにせり、此  
の如き未熟の眼光を以て東西古今の宗教を比較して大學生の前  
に講述せんとするは嗚呼の至りと謂はざるを得ず、其佛教徒に  
機關視せられ、語通七國無偏識など稱讃せらるゝは適彼が淺薄  
なるを證する者なり、此點に於ても彼が己れを知らざるを筆誅  
せざる可らず、我輩は彼に二三年間日曜學校に來り學はんこと  
を勧めんとす、

余が此駁論たるや決して完全なる者にあらず、其不完全なるを  
知るは何人よりも著者最も深し、然れども井上氏の一知半解的  
なる議論は之を以て十分に破壊し得たりと信ず、且又我は此に

三  
學者の席末に列なる一人として本論に従事せり、如何となれば  
我は國會記者も明記せし如く宗教に衣食する者に非れば也、然  
れども有名なる宗教家として余輩に先だちて井上博士を辨駁し  
たる者其人に乏しからず、新聞雜誌上にあらはれたる者に至り  
ては本多庸一氏の慷慨なる論評、横井時雄氏の痛切なる揚言(衝  
突恐るゝに足らず)等、植村正久氏の沈着深遠なる議論(今日の宗  
教論及び德育論)等枚擧に暇あらず、而して又其小冊子となりて  
世に公やけになりたる者も一にして足らず、横井時雄氏が「宗教  
上の革新」、小崎弘道氏が「基督教と國家」、宮川經輝氏が「基督教と  
忠君愛國」、松村介石氏が「我黨の德育」等甚だ多し、是等は皆徳高  
く識深くして眞に吾等の郷導と仰ぐに足る人々なるが故に、其

議論の價值實に大いなりとす、又藤村居士として時々「教育時論」上に公平の筆をふるはれたる久津見息忠氏の「耶穌教衝突論」にも一遍の讚詞を呈せざるを得ず、余は非徳淺學にして以上の諸氏とは敢て文壇に轡をならべて馳騁せんとするに非ず、只彼等の驥尾につきて驚馬の馳逐を試みたる耳、若し愚論にして幾分の功あらは江湖の諸彦請ふ之を彼等に歸せよ、若し罪あらは請ふ之を余に歸せよ、

最後に一言す、此駁論は元と雑誌掲載の目的を以て書きたる者なるが故に、雑誌上に在て毎號其れ自身に於て讀者に争點の一斑づゝを會得せしむるを期して文を綴れり、然れども今斯く一冊子として之を見るときは此の筆法必らずしも得策なる者と

は思はれず、是殊に讀者諸君の諒察を請はざるを得ざる點なりとす、

### The Reason Why.

Why cannot the unconverted soul  
perceive the beauties of true piety?

"I really don't see," said the old gray  
mole,

"What pleasure there is above the  
ground ;

I would much prefer to live in a hole,

Where plenty to eat can be found."

And the two little robins up in a tree,

Laughed so hard that they couldn't  
fly ;

"Of course," they twittered, "a mole  
can't see,

For he is blind—that's the reason  
why."

—Harper's Young People.

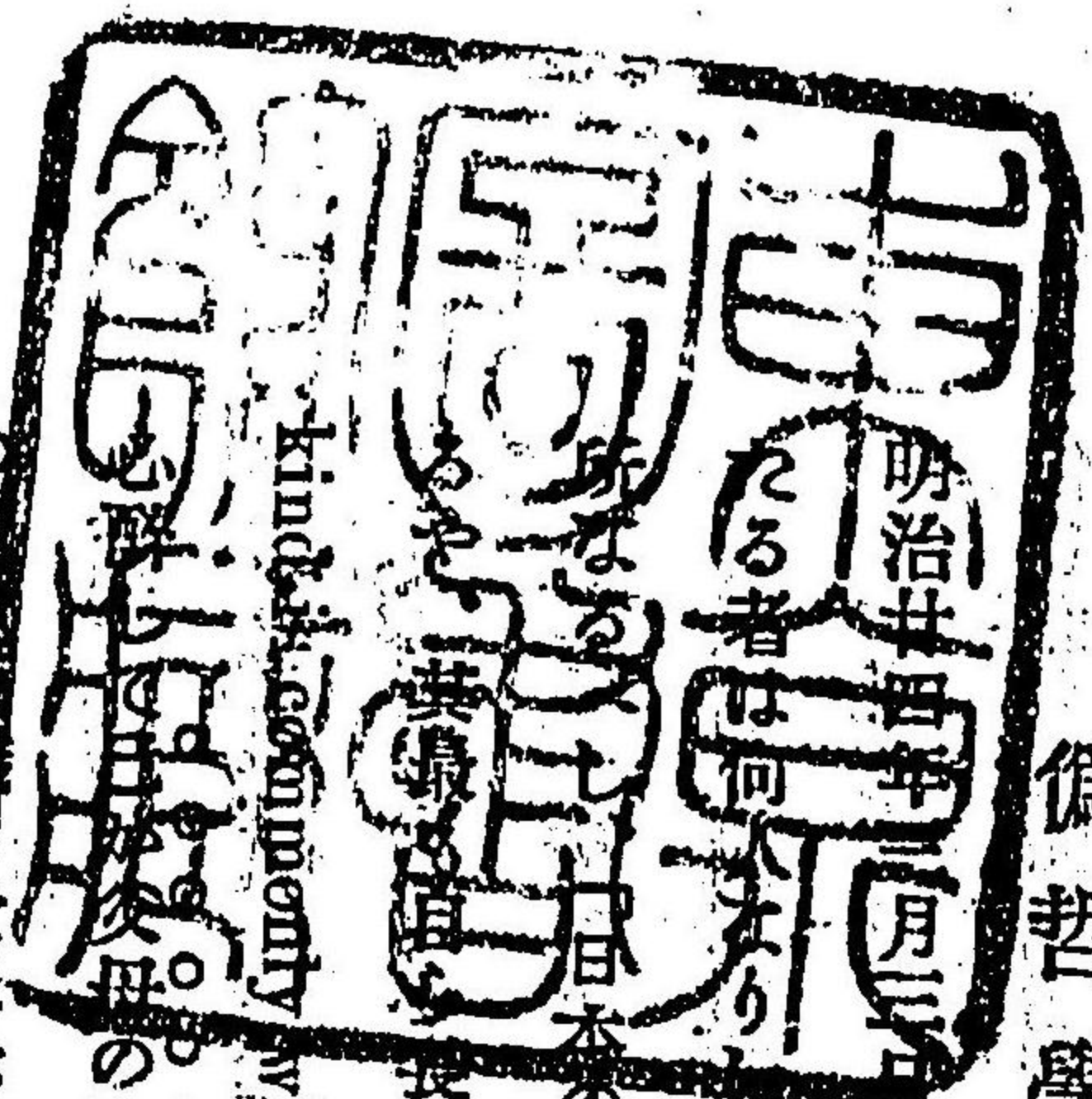
明治廿六年六月十一日

高橋五郎謹識

# 排偽哲學論

高橋五郎

## 偽哲學者の大僻論



明治廿四年二月三日の「國民之友」(第百十一號)に「日本の學者に告ぐ」てふ論文を寄せたる者は何れよりや、今日の文學博士井上哲次郎氏なりしこと蓋し萬人の記憶する所なるべし。日本の學者に告ぐ」とは嗚呼何ぞ其言の傲然たるや、彼は何處の學者なれば、其處とする(而して實は短處なるべし) for "the weakest spot in mankind's equipment where they fancy themselves to be wonderful wise") 獨逸の學に於ては、斯の如き標題を掲げて彼は傍若無人に自家の博覽多識を世に示さんと試みたり、先づ「富士の如き高山の絶頂に登」らざれば其眼界狹隘にして與に語るに足らずとなし、希臘羅馬英佛獨伊諸國に於ける古今若干の哲學者輩を列擧し、さも事新らしげに之を吾人の前に呈出したり、謂へらく此等は即ち

學者中の富嶽にして、己れ獨り之に攀ぢ上りたりと。嗟斯人もまた洋行學者の通患を脱し得ざりき。人は「三年たてば三歳になる」者なるを忘れたるか、今日に於ける我が學者(殊に哲學者)にして誰か井上氏が列掲せる如き古今の英賢を知らざらん。否な唯だ學者と稱せらるゝ人々のみならず、未だ業を卒へざる學生諸氏にしても、多くはエマルメンの書籍論(Books)若くはランボウンの百籍(Hundred Books)を讀み或は聞きて、井上氏が致へんと試みたるものよりは遙かに深く既に知る所あるなり、彼は更に一步を進めて大言を吐出すらく、

「我邦の所謂洋學者は……未だ真に洋學者と稱するに足らざるものなり、何んとなれば是等の人は大抵唯々歐洲一國の言語文章に通ずるものなればなり」云々、但し然らば歐洲諸國の語に通ずる者は何人ぞや、彼は即ち黙々の裏に夫子自ら其人なることを示せり、何を以て之を知るや、請ふ彼が該論說中に散點せる横文を見よ、拉句語あり、伊太利亞語あり、以西班牙語あり、先づ彼の「精神を養ふ」てふ拉句語(Spiritus intus alit)は姑く「志氣を鼓舞するの結果あり」てふ文字を以て餘處ながら翻

譯したりと見做すとも、其次に出たるホレンス(Horace)の詩(Medioeribus, esse poëtis Non homines, non Di, non concessere columnae)の如きは、拉句文中に希臘文法を混用したる頗る難句なるに(ホレンスの所謂「詩術篇」第三百七十二三句を見よ)、何の譯解をも——否な出處若しくは作者をだも——附記せずして之を掲げたり、以下皆此類にして、其甚だしきに至りてはイヌパニヤ文にすらも和譯を附する無し、「日本の學者」は僅かに一種の外國語に通ずる者なりと明言し乍ら、此の所爲は嗟何事ぞや、是れ「讀めるならば讀みて見よ」とて故らに然かせし者なるか、但しはまた其口には斯く放言したれども、其良心(彼は多分良心の存在を否む者なるべけれど)は之を咎むるありて、購らず知らず此に至りし者なるか、兎に角此の言行表裏は笑ふに堪へたり、彼また謂へらく、——

「我邦の洋學者は多くは唯歐洲の一語に通ずるに過ぎずして和漢の事は瞭然として知らざる者なり」

是に於て彼は支那の聖賢の名あるひは著書を擧ぐるに當りて必ず末に假名を以て支那

音を添へたり、嗚呼何等の博識ぞや、嘗て「哲學字彙」の卷末に *Notitia Linguae Sinicoe* より「清國音符」を掲載して以來、引續きて學習したりしや、其平上去入上平下平等八種の音を自在に嘲らるゝを聽まほし、

井上哲次郎氏は此の如く傍若無人に明治の學者を侮蔑し去れり、然りと雖も余輩は井上氏の傍に決して彼が理想せる如き學者の乏しからざるを見る、我が大學に當て教授たり或は今教授たる學者の中には余輩が敬服しざる人物鮮からず、歐洲古今の言語に通じざる人も亦帝國大學の内外に乏からず、井上氏にして單に目を開くの勞をとらば、如何に燈臺は下暗くとも、之を見ること難からじ、今其中なる著名の人士を此に掲げ出さんと欲すれども、却つて其人々に迷惑を及ぼさんことを恐るれば、單に此には著書上に顯はれたる一例を擧げて吾が言の妄ならざるを證すべし、「法典論」及び「隱居論」は誰の著述に係るか、苟且にも此等の書を繙く者は該著者が如何に歐洲古今の語に通じざるかを直ちに見とらん、否な唯に是のみならず、該著者はまた和漢の群籍を涉獵せし者なること歴然として見るべし、此の如くなるも尙井上氏は靦然として日本

に學者なしと放言し得るか、  
 余は固より井上博士が近頃の「大癡論」(宗教第十七號)と稱する「教育と宗教の衝突」を批評せんと欲する也、然れども本問題に論じ至る前に豫め先づ此に該論の筆者たる哲學者は如何なる種類の哲學者なるかを説かざるべからず、是れ該論の價値を明らかにするに與りて力あるべきを以て也、請ふ余をして言はんを欲する所をつくさしめよ、余輩は井上氏に對して駁論を試らむるに毫も顧慮するを要せず、彼は厚生館に於て既に公然と決闘の我が國に許すべからざるを説けり、決して決闘を申し込まざるの恐なし(其決闘の種本は或る百科全書にして而も幾分の誤解ありたりと聞くと雖も、田口氏と井上氏との論戰未だ終りを告げざるが故に、事の是非は未だ知るべからず)、彼は其得意の歐洲國語評中屢々獨逸を稱揚し、「現今歐洲の諸語中にては唯々獨逸語最も古語(希臘拉甸の)に近きが如し」と言ひ、英語は商人の語にして獨逸語は學者の語なり、後者の中には他國語に譯し難き文字多し、例へば *Anschauung* (Anschauung) の如し杯と言散せり、(若し鍛鍊極まれる言語と粗硬至れる言語とを以て最も相近き

者とせば、如何にも獨逸語は希臘拉甸の古語に近かるべし、英語にして「ニエークス」ニアル、ボルク、パイロン、マコーン、カーライル、カンフズ、ロツク、ミル、ハ  
ミルトンの語ならずんば之を商人の語と言ひて可なるべし、マンシヤウウツクにして  
 若しインテウイニオン Intuition 即ち直覺の譯語なること獨逸の哲學者キルヒナルが  
 説ける如く Anschauung (intuition) bedeutet die unmittelbare Vorstellung ならずん  
 ば、彼の引例風に當を得たる者なるべし、——是の如く獨逸に心醉せる人にして該國  
 の華たる決闘を排斥するは殊勝の至と謂ふべし、近頃或人は井上氏に彌勒博士の敬稱  
 を呈したりと聞く、彌勒菩薩は即ち佛教にて所謂將來の救世主なり、博士が我が哲學  
 界に救主たらんとする多望の將來を豫標して此の美稱をさくりたる者か、余輩の不敏  
 なる未だ之を詳かにせざる也、

閑話餘談は姑く之を措かんに、要するところ井上氏は「日本の學者に告ぐ」てふ論説に  
 由て尊敬を買ひ得ず、案外にも輕蔑を買ひ得たり、是實に是非なき結果と謂はざるを  
 得ず、自讀若くは自薦の擧たるや其物自身に於ても決して美なる者にあらず、况んや  
 之に加ふるに賤他の嫌ある言辭を以てするに於てをや、固より此なる場合には當らず  
 と雖も、ニエークス、ニエーナルは此種の弊を極言して曰く、  
 It will come to pass,  
 That every braggart shall be found an ass.

我國の學者の中には此語の當るほどに甚しく傲慢なる者は未だ一人もあらずと雖も、  
 是れ薄弱なる人類が陥り易き弊なるを思へば、余輩焉んぞ自ら戒しめずして可ならん  
 や、

井上博士の人望斯の如く日々に落んとするや大光、又も彼をして哲學者たる體面(彼  
 は哲學研究のために多年官費にて獨逸に留學したる者なることを記憶せよ)を傷つけ  
 じめんとする一椿事こそは起りたれ、

佛教の禮拜徒らに外形の虚式となり來るに隨ひて我が國の道德は年を追ふて頽壞し、  
 遂に維新後の無宗教界を我が社會に現出せり、道德界に於ける無宗教は政治界に於け  
る無政府と一般なり、俱に千差萬別の民心を檢束するに足らず、是に於てか風俗日々



に澆薄輕浮に流れ、人と人との間に於ける信用地を拂ひ、詐僞奸惡の徒白晝に横行闊歩し、復た敦厚の美德ある無し、佛教は未だ眼全く醒めずして之を救ふに力なく、基督教は傳はれる日尙淺くして之を挽回する能はず（我國にて眞に宗教と稱すべき者は只此二なればなり）、而して教育の任に當る人々各々己れの信ずる所の道を以て修身の原則となさんと欲し、異同相攻伐し、紛紛擾擾終に歸着する所なからんとせり、是に於てか我が 聖天子畏くも宸襟を惱ましたまふて明治二十三年の十月三十日に「教育勅諭」てふ簡短の聖詔を垂れ給へり、道德界に於ける此の勅諭たるや政治界に於ける本年の詔勅と同じく、全く止むを得ざるに出たる者なれども、斯くも幾度か聖天子を煩はし奉るは臣民の宜く恐れ惶こみて措かざるべき所なり、余輩謹で該詔諭を拜誦するに、全く是れ普通の實踐道德を簡潔に説示したまへる者にして、毫も間然すべきを覺えず、眞に是れ實踐道德（フランクチカル、モラリテ）の大綱とも稱すべき也、其細節小目に至りては世の教育家宜しく之を敷衍すべし、然るに政治界に於けると同じく茲にもまた曲學阿世の徒輩あり、維新の初に於ける尊王攘夷家をきどり、徒らに大言壯語し

て民心を煽動し、妄りに勅諭を曲解して隱に私情を満たさんと計るや至らざる無し、此種の人々の中に在て井上哲次郎は兎に角勇將たる者なるが故に、今より此人の「教育と宗教の衝突」と題する論説（教育時論等に掲げたる者）を之が代表者として評論せんと欲す、余輩が之を爲すや固より公明正大を期し、一に哲理を以て之が審判者たらしめん耳、

井上氏は哲學者なり、否な哲學者たらざるべからず、然るに彼が該の論説に於て試みたる所は徹頭徹尾獨斷放言にして毫も哲理を其間に適用したるを見ず、全く哲學者たる資格を失ひ、哲學者たる本領を脱し了りぬ、其の立論の根據は只左の一事に存す、曰く、

「勅諭の主意は國家主義なり」、「耶穌教は無國家主義なり」、「耶穌自ら能く國家の事を知らざりしものと見え、新約全書中國家の事を説く所殆ど之れ無し」、「耶穌は元來國家を主として教を立てたるものにあらず、種々なる國民の上に脱出し自ら萬國普通と認むる所の教を開きたるなり、是れ實に耶穌教が勅諭と相合はざる所以なり

嗟是果して多年獨逸に留學したる哲學者の辨なるや、是豈狂人の癡言に彷彿たる者に  
あらずや、

第一に教育勅語を國家主義なりと曰ふは是れ獨斷の言たるのみ、國家主義にも個人主  
義にも該勅諭は偏したる者にあらず、是れ普通の實踐道德を諭したまへる者なり、故  
に曰く是れ「皇祖皇宗の遺訓」なりと、他語を以て之を言へば是れ我が國人が古來守り  
行なひたる道なる而已、

第二に耶蘇教は無國家主義なり云々と云ふが如きは宗教と道德と政治との區別を辨へ  
ざる無知漢の妄言として度外に置くの外なきを感ず、如何となれば餘りに愚にして論  
外なるを以てなり、敢て問はん汝の意に於て佛教は何主義と思はるや、妻子珍寶及  
王位臨命終時不隨者と觀じて、厭世的に五倫を破ることを主義とする者はれ佛教にあ  
らずや、然るに彼は言ふ「多神教たる佛教は古來温和なる歴史をなせり」と、暗々裏に  
佛教を庇護す、嗚呼彼は未だ佛教の何物たるを知らざる也、只世間の俗佛教（ポピニ

アル、アマム）を見て直ちに謂へらく是れ佛教の眞面目なりと、因て佛教を多神教  
なりなど公言して愧ぢず、而して「唯一神教たる耶蘇教は到る處激烈なる變動をなせ  
り」などと喋々す、實に彼が胸中には天地の眞理を愛するの念は露ばかりも有る無し、  
未だ宗教と政治と道德との區別を知らず、幾百千年我國に行なはれたる佛教の本旨を  
解せず、毫も哲理を問はず、單に一偏の愛憎に由て天下の最大事たる宗教を是非せん  
とす、僭妄もまた甚だしと謂ふべし、獨逸の大哲學者ヘーゲル曰はずや——「宗教は  
靈神と靈神との關係を以て基礎と爲す、凡そ其心を有限界の刺衝外に推擴せざる者、  
無限界を豫想して其志望を高尙にせず、虛明の絶境を瞑觀して此に精神を馳せざる者  
は、決して宗教の事を談すべからず」と、眞に然り、井上氏は斯の如き事に喩を容る  
べき資格なき者なり、彼また果して國民主義(Nationalitätsprinzip)又は個人主義(In-  
dividualitätsprinzip)を論談すべき用心あるや、  
固より余輩は此等の件を後に詳論すべしと雖も、此に先づ其看破したる所を一言せん  
と欲す、

井上哲次郎氏の胸中には無数の偶像充ち満てり、少しにても哲學の領分に踏入りたる者は必ず「ノヴム」が其哲學界に一新紀元を開きたる大著「ノヴム」(Novum Organum)の中に四種の偶像を列擧したるを知らん、曰く人種の偶像 (Idola tribus)、曰く洞窟の偶像 (Idola specus)、曰く市場の偶像 (Idola fori) 曰く劇場の偶像 (Idola theatri)、此等四種の偶像彼が心裏に充滿せり、殊に其第二の偶像もつとも勢を振るを見る也、「ノヴム」其形而上學書に哲學者の用心及び精神を説くにあたりて、「ノヴム」の此の大著中より左の一節を引て掲げたり、曰く「Aditus ad regnum hominis, quod fundatur in scientiis, quam ad regnum coelorum, in quod, nisi sub persona infantis, intrare non datur (哲學界に入るは猶天國に入るが如し、嬰兒の心を以て心とするに非ざれば終に入ること能はず、第一篇六十八節)、固より此の名言たるや基督が「汝等嬰兒の如くなるにあらざれば天國に入ること能はず」と宣られたる妙句を此に哲學界に適用したる者なること何人も知る所なるべし、然るに井上博士の心中には百千の偶像群がりて見ゆ、彼が心は既に哲學者の心に非ず、

(未完)

### 高橋五郎氏に寄する公開狀

拜啓小生が數月前教育時論に投稿したる「教育と宗教の衝突」は全く一時の談話を敷衍したるものにて其文も未だ完備せず且つ引例中多  
 少不確なるものも有之候故追て正誤致し一冊子として世に公にする  
 積に有之候間君の御批評は其上にて充分被成下度候勿々不備

三月二十八日

井上哲次郎

高橋五郎様

## 悔悟の哲學者

悔悟すれば、鬼も佛なり、悪魔も天使なり、故に余は「偽哲學者の大僻論」てふ題を茲に「悔悟の哲學者」と云ふに變せんと欲す、休戦前の井上につきては論せんと欲するところ山の如く多しと雖も、彼すでに白旗を掲げ且休戦を請ふの公開状をさへに出したれば、——而して余輩もまた窮寇を追はざる事として其懇求に應じたるが故に、既往は既往たらしめて復逞せず、今よりは専ら休戦後の井上を評せんとす、但し其細目に論及して一々に敵の論據を奪ふの前、先づ此に其大體につきて詳論する所なくんばあるべからず、是れ最大緊要の事たるを以て也、慧眼の觀察者の夙に看破せられたらん如く、井上哲次郎博士の議論には少なくとも三期あるを見る、即ち過激の期、温和の期、必死の期是なり、——其第一期に在ては宛がら野猪の突出して土を踢り氣を吐くが如く、人之を猪武者とも言は言へ亦小勇の觀るべき者なきには非りき、其第二期に在ては逡巡躊躇首鼠兩端、進まんと欲して進む能はず、退かんと欲し

て退く能はず、進退維谷まりて、只管曖昧模稜を事とせり、其第三期に至りては則ち恰も手負猪の如く、當るを幸ひに人を噛んとして、必死の苦戰奮闘實に甚だ努むと雖も、早く既に孤城落日の光景を呈して、四面楚歌の悲境に至らんとす、此の第三期は抑も何れの日より始まりしぞや、余輩の所見を以てすれば、是れ即ち去月六日より始まりし也、さればにや其翌々日、即ち四月八日帝國大學講義室に開かれたる「釋尊降誕演說會」に井上博士は飛入演說をなし大に余を誹りて佛教徒に訴へたり、其如何にも狼狽して寢食を安んぜざりしことは彼が冒頭に先づ突如として「諸君佛教は善い者です」と言ひ出たるに徴して明かなるが如し、亦實に許多の聽衆も然か感じたり、余輩は聽聞者の然か評しあへるを聞きたれば也、如何に釋尊の降誕會なればとて、佛教徒は小兒にも非れば、斯くも小兒を賤すが如き諛言——「佛教は善い者です」——には争か感服せん、宜なるかな意外にも（吾等は意外とは決して思はぬとも井上氏より見れば意外にも）聽衆の中より大聲叫呼して聞くも憐れなる種々の美名尊稱を博士に呈したる多かりし事、寔に自業自得、爾より出たる者は爾にかへると聖人の我を欺かざ

りしを驚歎すらく耳、嗟此に至りて彼は其曾て休戦狀を書したる精神を忘却し去れり、此の言外の精神を措きて單に彼の休戦狀の文字（即ち形骸）のみを見るときは、其徹頭徹尾不條理にして、全く自語相違前後矛盾なること一目に瞭然たり、而して此事は既に二三の慧眼者が摘發して世間に示したる所なり、此に余は是等の諸士に其筆勞を謝し、併せて之が明快の文章を此に借載せんと欲す、

宗教哲學界に聞識の洽博と思想の深邃とを以て高く挺でたる植村正久氏が主筆たる「日本評論」には實に左の痛切なる短評を以て井上氏を詰れり（第五十號）、

（前零）「殊に怪しむべきは井上哲次郎博士の休戦狀なり、彼は本月廿八日高橋五郎氏に左の公開狀を送りたり云々

井上氏の議論は、本邦數萬の基督教徒に對する告誡狀にて、之に與ふるに不忠不義の臣民たりとの名を以てせり。然るに井上氏は是れ一時の談話にして不確なる條もありと云はる、言論を苟しくもせず、殊に斯の如き場合に於て文章の責任を重んずべきは言ふまでも無きことなるに博士の輕忽此に至れるは何らの怪事ぞ。余輩は博

士として、學者として、大學教授として、彼が如何なる面目を以て世に立たんとするかを知らず」。

眞に是れ寸鐵を以て人を殺すの文字と謂ふべし。

山路彌吉氏は多望の青年文學者なり、彼また「護教」第九十三號に井上哲次郎氏に與ふと題する書を掲げて大いに針砭を博士の項門に加へたり、文字また勁健にして誦すし、其詰實の第二項を左に抜載せん(圈點等は記者の施せる者)。

「(一)彼は學者らしからざる也、吾人は彼れの面皮の極めて厚きに驚かざるを得ず、彼は論文の冒頭に於て何と書きしぞ、曰く

余は久しく教育と宗教との關係に就いて一種の意見を抱き居りし其事の極めて重大なるが爲めに敢て妄りに之を敘述するを好まざりき

と、何ぞ夫れ學者らしきや、何ぞ夫れ鄭重なるや、然るに其舌の根の未だ乾ざるに、彼れは左の如き書簡を高橋五郎氏に寄せしに非ずや(書翰は畧す)。

何ぞ其輕躁なる、曩に鄭重らしげに書き出したるに對して耻づる所なき乎」。

但し此等の評論よりは幾層詳密にして又等しく肯綮にあたる者は「福音之使」第九號に大石氏が寄せたる大文字なりとす、是れ如何にも善く世間具眼者の所見を代表し得たる者を見ゆるが故に、其稍長きをも厭はずして此に掲出す。

「世の是と非とする所の者」に取扱を先達の意見に決させば學者なる者一言を吐き一行を爲すも苟もす可からざるは論を俟たず近頃教育と宗教の問題はしなく一場の議論を惹起せしより博士井上哲次郎氏は教育と宗教の衝突なる論文を草しキリスト教の教育勅語と相容れずして國家破壊の基なる由を喋々し其例を佛教新聞雜誌の雜報より引き來りて大に攻撃を試みられたり爾來甲論乙駁大に辨難の火花を散らしたりしが氏の腦を刺し胸を貫きて氏の眞面目を暴露せること未だ國民之友第百八十五號に於ける高橋五郎氏の偽哲學者の大僻論てふ痛快なる論文の如きはあらず如何に頑固なる氏の胸柵も此彈丸に堪へずやありけん其の議論未だ半ばにも達せざるに吾人は國民之友第百八十六號に左の如くべき一章を見るに至れり

(公開状は略す)

見よ氏は旗を卷て高橋氏の軍門に降り氏は引例中不確なる者ありと自白せり氏は自ら不確なりと認むる者を論據として宗教上の大問題を論斷し去らんせり其大膽其自負誠に驚くに堪へたり然れども氏が不確なる引例の上に建たる議論にして教育時論に顯れたる第一回の談話ならしめば暫く恕す可しとするも再び教育時論あるひは宗教紙上にあらはれ出たる「教育と宗教の衝突」なる者は氏の第一回の談話が横井本多其他の諸氏に論議せられたるを以て此等諸氏の議論を一擊の下に打ち破らんを改めて草せられたる反駁的性質を有する長篇なり

試みに氏の言を擧て如何なる意氣込を以て夫の文を草せられたかを證せん氏曰へらく  
 某氏は六合雜誌第百廿五號に「德育に關する時論と基督教」と題せる文を掲載し主として余が談話の主意を辨  
 駁し某氏は教育時論第二百七十六號及其次號に「井上氏の談話を讀む」と云へる文を寄送して百方耶穌教の爲  
 めに辨護せり其苦心想ふべし……其固執の爲めに眞理の光を見ること能はざる誠に憫むべき事なり……  
 ……彼等は實に一々答辨を爲すほどの價值あるものにあらずれば余は此文を草して一度に之れが答辨を爲さ  
 んと欲するなり

然り氏は實に自ら答辨するの價值なしと信する者に向て答辨の勞を取れり

氏又曰く余は今余が主意の存する所を明瞭にせん耶穌教徒は極公平なる念慮を以て余が主意の存する所を領  
 解せざるべからず……且つ余は耶穌教に就いて陳述すべき事多きも成るべく之を後日に運延せるに耶穌教  
 徒は益々迫りて余をして余が秘する所までも陳述せしめん

果して知る氏の今回の議論は耶穌教徒の反對に會ひ絶大の抱負を以て自家の秘密を吐露せる者なることを夫の  
 前提を掲げて耶穌教徒に公平なる心を要求し置くが如き耶穌教徒が迫るに因りて餘儀なく己れの秘密を告ぐ  
 と云ふが如き情も諳んで夫子の說を聞けり曰はん計りの語氣を見るときは如何に考ふるも論議中不確なる引例  
 (吾人は之あるを知る事雖も)を用ひしことは思はれざるなり而して豈に圖らんや氏自ら之あることを知れること  
 を何ぞ世人を小兒視するの甚しきや(下略)

井上氏が自ら明言せる如く今此に争點たる所の者は眞箇に「重大なる」問題なり、井上

氏は斯の如き大問題を論ずるに足るほどの準備未だ有らざる也、唯に準備なきのみな  
 らず、又之を論ずるに適する精神あらざると我が嚮の駁論中に説き始めたるが如し、  
 随つて斯の如き人生の最大事件には喩を容るべき權理も資格も無き者と謂はざるを得  
 ず、彼は佛人レンナン (Reann) を妄信したり、彼は英人レンツキ (Locky) を誤解したり、  
 若し哲學者らしく事を論ぜんと欲せば、奚ぞ自家の眼を以て歸納的に研究し來らざる  
 や、レンナンを如何なる者と思ふや、彼は燦爛たる大文學者なるや毫も疑なし、其長處  
 の此に在ると同時に其短處も亦此に在る也、彼が聲價は今や單に「文學的美術家」(Lit-  
 erary artist) として存する而已、其聖經及び基督教若くはイエスに關する批評は十中  
 八九憑虛駕空の想像説にして、小説若くは演義としては、西遊記或は三國志の如く、  
 多少の興味なきに非ずと雖も、所謂「高等なる批評」(higher criticism) としては殆ど  
 一顧も價せざる者なり、井上氏は「高等批評」の「本場」たる獨逸に多年留學しながら未  
 だ此の著明なる事實を知らざるや、盲も亦甚だしと謂はざるを得ず、彼れ口を開けば  
 則ち言く我れレンナンを巴里に訪ふて數時間會を把て相談論せり、言く某を某處に閉口

せしめたりと、其レンナンに接見せられたるを誇る「豈夫然らんや然るべからず」ため  
 に言ふならば尙恕すべきも、由て以て此の大問題を論断すべき典據 (authority) とし  
 て此人の説を擔ぎ出したりとせば、嗟博士も亦既に時世に後れたる人なる哉、  
 次に彼はレンツキを頻りに抵敬して立論の根據をまた是に取れり、謂へらくレンツキの説  
 に依れば羅馬帝國の滅亡を來したるものは基督教の非國家主義なりと、「彼は其第二期  
 に在て某氏に向て明言すらく、我所謂非國家主義とは國家主義を積極的に非とせしを  
 謂ふに非ず、只消極的にして國家主義を説かざりしを謂ふ耳と、今第三期に在て其説  
 は何如ん、先づ彼が非國家主義とは不説國家主義の意と見做して可なるべき歟、然らば  
 彼が論據は自滅したる也」、元來レンツキは基督教徒にあらざれば、其説る所も、若し之を  
 信ぜんと欲せば、先づ之を他の著述家が言へる所に参照せざる可らず、且又レンツキと  
 ても確かに實相を看破し得たりとは自ら信ぜず、往々推斷揣摩を下して後の讀者を待  
 てる耳、然れども流石にレンツキの事なれば決して井上氏が信ずる如き事を主張するに  
 非ず、即ち彼は羅馬の滅亡を獨り基督教の所謂「非國家主義」に歸し去ることをせず、却

つて謂ふ、羅馬府は天下の諸宗教と諸哲學の競争場若は共進會場なりしが、基督教の  
 ひに其他に凌駕する若干の長處あるを以て獨り勝を制し得たり、他語を以て之を言へ  
 ば是れ優勝劣敗たりし也と、レンツキが歐羅巴道德史卷の二に就きて「The progress of  
 Christianity due to the disintegration of old religions, & the thirst for belief which  
 was general. 及び Singular adaptation of Christianity to the wants of the time. pp.  
 386—390 等の諸項を參觀せよ、  
 又羅馬に無國家的現象の如き者、即ち四海兄弟主義の漸々に弘まりし事にひきてはレ  
 ツキ説をなして曰く、「是れ第一には希臘と羅馬の兩開化の合併したるに起因す、而し  
 て希臘の四海兄弟主義は其哲學とレニキサンマルの戦勝に起因し、羅馬の四海兄弟的  
 精神は貴族の衰滅に由て強まり、植民地の擴張と旅行の便利とに由て廣まり、羅馬の  
 大著述家の中に外國人多かりし事と、奴隸の解放せられたる者夥かりし事等其他若干  
 の原因に由て益々熾んになり、士多亞哲學すらも亦能く此精神を表するに至れり」と  
 (同卷二百二十七頁より二百四十一頁までを見よ)、固より余輩は此等の事を後に委し



く論ぜんとすれども、一瞥したる處にても、已に此前提ある以上は、た縦や多少基督教を屈ふる如き言句ありたればとて、之が爲に井上氏の如く基督教を以て羅馬滅亡の原因となし、随つて我が國の滅亡を來すべき原因となすは、適其思慮の淺薄なるを自白する者に非ずして何ぞや、單に政治學者たるブルンチの如きも亦汝が僻見を矯すに餘りあり、請ふ哲學者てふ階級の恥辱となる勿れ、羅馬帝國は其れ自身真正の國家にあらず、又倒れたるは自然の數にして其原因固より一ならず、之を基督教の罪に歸するは昔ニロ帝が羅馬府に火を放ちて之を基督教徒の所爲に歸したるが如く、又羅馬人民が災害の到るに遇へば之を基督教徒の招致に係るとなしたるが如し、是れ壓制家の言なり、迷信家の譏諷なり、劣者の愚妄なり、曲學者の故造説なり、假にも哲學者の肩書ある者の爲すべき所ならず、

諸是の如く井上哲次郎氏が立論の基礎と頼みたる者すでに兩ながら非なり、是れ實に自家の脚を以て歩く能はず、自家の眼を以て見る能はず、自家の心を以て思ふ能はず、徒らに猿猴然と模倣を維れ事としたるの過に坐す、流石に彼も斯の如き盛氣樓をば堅

城鐵壁と頼む能はざりしと見えて、單に演繹的ならず又歸納的に論證する所あらんと試みたり、即ち彼は既に哲學者たる目も無く心も無きを以て、佛教者より授けられたる若干の所謂「不敬事件」或は「不孝事件」をいと重々しげに提出し、耶蘇教徒が其教理と主義の然らしむる所として不忠不孝の大罪人たることを證驗せんと務めたり、余輩は萬一果して彼が提出したる如き形跡實地に之れありとするも、毫も之を以て基督教の罪となすを得ず、請ふ請みに彼等が精神を問へ、汝が如き無主義無節操なる心の鏡に照して正人君子の心腸を邪推する勿れ、彼等は良心ある者なり、天を畏る者なり、神を敬ふ者なり、眞理を重んずる者なり、現在未來永遠生死等の大問題に心を注ぐ者なり、萬物の靈たる身を以て木石禽獸を禮拜するの非なるを知る者なり、衆に率先して齋弊を洗除せんと務むる者なり、決して彼等は人を畏れて進退し若くは利を見て節を曲ぐるが如き腐敗人物に非ず、然るに守舊頑迷固陋無識の狐群虎威を借て之を壓制し以て自家の私心を満たさんとするが如き事屢々實際に起るが故に、勢ひ衝突を來さざるを得ず、然れども彼等は既に道義の根本たる天を畏れ、衆徳の淵源たる神を敬ふ、

此心即ち君に對しては忠となる、父母に對しては孝となる、國に對しては愛國心となる、故に率鎌倉といふときは、「海ゆかば水漬く屍、山ゆかば草むす屍」、眞先に大君の馬前に打死せん者、一旦緩急ある時には第一に國難に殉せん者は、必らず彼等なるべし、彼等は已に道徳の根柢を把持す、其細目及び枝葉は自然にして生ずべし、王陽明の知行一致其他の主義につきては他に如何ばかりの異議あるにもせよ、左の一節の如きは大いに取るべき所あるを見る也、傳習錄に曰く、

愛問、至善只求諸心、恐於天下事理有不能盡、先生曰、心即理也、天下又有心外之事、心外之理乎、愛曰、如事父之孝、事君之忠、交友之信、治民之仁、其間有許多理在、恐亦不可不察、先生嘆曰、此說之蔽久矣、豈一語所能悟、今姑就所問者言之、且如事父不成、去父上求箇孝的理、事君不成、去君上求箇忠的理、交友治民不成、去友上民上求箇信與仁的理、都只在「此心」、心即理也、此心無私欲之蔽、即是天理、不須外面添一分、以此純乎天理之心、發之事、父便是孝、發之事、君便是忠、發之交、友治、民、便是信與仁、只在「此心」、去人欲、存天理、上

### 用功便是

是の如く共和國の民は君主なきが故に忠君の念なし、然れども之が爲に共和國民は不具者或は不徳者なりとは決して謂ふべからず、世に父母なき者は孝心なし、無きに非ず、發して孝となるべき機なき耳、之を要するに種々の徳行は一箇の人道即ち本分 (devoir, duty) として之を貫ぬくなり、故に希臘人は此の本分をイウセパイア (eusebeia) と稱へ、羅馬人は之をピエタス (pietas) と稱へたり (此事につきては後に至りて尙大いに言ふ所あるべし)。

右の如き道理あるが故に、余輩は井上氏が得々として掲げ出せるが如き形跡實際にありたりとて、決して之を不忠不敬の大罪とはなさず、——稀に誤りて全く不敬若くは不孝の舉動をなしたる者あらば、第一に鼓を鳴らして之を攻むる人は必らず同宗の信徒なるべし、世は廣し、人は衆し、廣き世界の中、衆き人類の中、固より心得違の者なしと謂ふべからず、自由て貴重なる目的を達せんために世には暗殺若くは狙撃て兇惡の手段を用ふる者往々にして在り、其手段の稀に兇惡なるを忌みて貴重なる自

由を全廢せんか、恐らく天下には精神の健全なる人にして斯の如き愚癡を主張する者は無かるべし、然るに井上氏は正しく此事をなしつゝある也、ドライヤン (Dryden) 曾てシヤムツベリ侯を嘲りて大才と狂人とは相去ること一髪のみ、

“Great wits are sure to madness near allied,

And thin partitions do their bounds divide.”

と歌ひたるが、井上氏もまた大才なるにやあらんずらん、又聞くナポレオン第一世はモスコツより敗れ退ぞくに當りて屢々左の語を口に發したりと云ふ、

“Du sublime au ridicule il n'y a qu'un pas.”

「高妙より見識に轉ずるは只一歩のみ」

されば井上博士が自ら珍重して鷹の子となす所の議論が實は遼東の白豕にして、斯の如く見識に等しき者なるもそのみ怪しむを須ひざる也、

我輩は老婆心の餘り此に取て井上博士に告げんとす、井上氏が固陋管見なる主義——即ち彼が曲解狂説する所謂「國家主義」——を意のままに實行したらんには、必ず愛

國者には畏くも我が聖主をして露を凌ぎ夜を侵して百里の遠地に外國の皇太子を見まはせ奉り、我等臣民をして大君のため祖國のために切齒憤慨の餘其肉を啗はんとまでに激せしめたる津田三藏君を夥しく生ぜん、忠君家には則ち西野文太郎先生を夥しく生ぜん、孝子には即ち其懐なる妻の腹を割きて生肝を母に供しつゝ端なくも彼の昔し母の爲に兒を埋めたる支那の孝子と和漢一對の美談となりし河野儀平君を夥しく生ぜん、只津田三藏君が兇刃を弄せるや全國の諸新聞中「日本新聞」が第一に率先して此の大愛國者先生を「大馬鹿者」、「大癡漢」、「大狂人」、「大國賊」と罵りたるこそ實に我輩が千歳の大恨事とする所なれ、井上博士に於ては請ふ然か我が子を他人視する勿れ、但し以上の論辯は余輩が假に數百歩を譲り、井上博士が提出せる話を實際の出來事と見做して言へる者のみ、然れども彼の引例は皆反對の新聞雜誌(佛教の新聞雜誌)が或は無根の事實を捏造し、或は針小の出來事を棒大にし、或は正人の心を壓んとし、或は名士の譽を傷けんとしたる者なることは、今に於ては井上博士もまた自ら之を認むるに至れり、彼の公開狀に「引例中多少不確なる者有之」と見えたるは更にも言はず、

此度「正誤致し一冊子として世に公けに」せられたる同題の書にも亦其序文中に

「然れども反對者の報道盡く確實なりとは言ひ難し、故に事實を確實にせんがため横井時雄氏に托し、其公平なる報道を得たるを以て之を卷末に付せり」

と明記したり、然のみならず内村鑑造氏の事に関しては同氏の公開状を掲げて

「余は此に氏の言を擧げて以て氏に關する記事の誤を正す」と特記したり、

然るに斯の如く引例の誤謬を正し來れば、奥村頑次郎氏一件を除きて、他の事實は大抵皆な消滅し去れり、折角博士が幾分か歸納的に構成し來りたる屋氣樓は「一の海市として烟散霧消し了りぬ、而して其僅かに残れる奥村事件は不敬事件にも不孝事件にもあらず、天下の聖賢が皆均しく唱へし所にして井上氏の如き偶像を心中に充たす哲學者が獨り會得せざる所の者のみ、是れ孔夫子が説かれたる所なり（四海之内皆兄弟也）論語）、是れ釋尊の宣られたる所なり（萬流入海同一鹹味、四姓出家同稱釋氏）」増一阿含經）。

斯の如く井上氏は横井氏の調査報道を附録にして正誤にかへたり、少くとも此等の事實に基きたる議論は自然に消滅せる也、嗟彼は「他の一方をも聽け」—Audi alteram partem—ては格言を守らずして不法にも毒筆を以て正人君子を不忠不孝不義の大罪人と譏誚したり、而して事もなげに之を正して醜然と其大學教授の職に留るは豈亦奇怪千萬ならずや、噫、——而して余輩が正々堂々其哲學者たる精神なきを詰れば只頻りに「人身攻撃」、「人身攻撃」と呼ばりて哀愁を世人に乞ふことをす（此事につきては尙後に委く辨破する所あらんとす）、何ぞ其輕重と黑白とを分別せざるの甚しきや、且又我國に於ける事實の悉く消滅せしのみならず、其歐羅巴の學者より借り來りたる事實も信ずべからざる者なることは（尙後にも言ふべけれども）已に上に説けるが如し、然らば現今の歐洲諸國に之を徵せんか、獨逸も基督教國なり、魯も佛も英も伊も皆然り、此等の諸國は即ち井上氏に國家主義ては觀念を教へたる師ならずや、然れば是れ國家主義ては觀念は基督教國よりして佛教國民が學びたる者といふべし、獨逸は果して國家をなさいるや、基督教のためは土崩瓦解に瀕せるや、佛蘭士は何如ん、魯

英伊は何如ん、近頃獨逸の某哲學博士我に語りて曰く吾人は基督敎が非國家主義ならざる活證人なりと。

井上氏は斯の如く徹頭徹尾論據を失ひ文陣を打破せられたり、彼もし今にして謹慎せば、余輩は肯て追窮せざらんとすと雖も、演説上に雜誌上(學藝雜誌)に博士は益々其前説を改めざることを主張して、其一旦悔たる所の非を飽までも遂げんと務む、而して唯に防衛的の舉動をなすのみならず、又暗に進撃的の舉動をなして、勝利を萬一に僥倖す、事此に至れば、余輩辯を好むに非ずと雖も止むを得ざる也。

今日井上博士は日本國中に殆ど孤立す、新聞雜誌にして若し政治上輿論を代表する者なるを信せば、其また宗教上及び學術上に於ても、大小淺深の差こそはわれ、輿論を代表する者なるを信せざるを得ず、請ふ左に少しく之を論ぜん、

彌兒頓ミットンの出版自由論(アノオバチアカ)に絶叫して曰く「真理は全能者に次で力強き者なるを誰か知らざらんや、請ふ真理と虚妄とをして相闘かはしめよ、古來何れの日にか自由公平なる争闘に於て真理が敗をとりし事ある」と、寔に邪は固より正に勝つ能

はざる也、是を以て余輩が弱腕を揮ふて聊か真理の爲めに群邪を掃はんと試むるや、大日本全國の新聞紙一齊に義侠の筆を授て、異口同音に曲學派の勇將を嘲笑し、内外の人々をして轉た其義を見て爲すの勇あるを驚歎せしめたり、實に明治の一大盛觀として萬世のために特筆大書すべき者と謂つべし、

天下の流行は佛蘭士より出で、佛蘭士の流行は巴里より出づ、斯の如く日本の流行は東京より出づ、是より推して言ふ時は日本全國の輿論は先づ東京に於て之を観るを得べし、故に余輩は此に東京の大小新聞紙中に就て本件に關する輿論の一斑を描寫せんとす、

民權の干城たる大政黨の機關として天下に畏敬せらるゝ自由新聞は去月(廿六年四月)六七兩日の紙上に「學者界の一珍事」と題して大いに井上博士を嘲笑し、文學博士兼大學教授たる者亦斯の如き醜事あるかと詰難したり、固より該雜報中に載せたる所の事の悉く眞なるや否やは余が明言するを得ざる所に於て、之が眞偽の鑑別をば一ばら井上氏が「教育と宗教の衝突」と我が此の評論の言意とに譲らざるを得ずと雖も、其中

に「自稱哲學者の高鼻を叩き始めて痛快の感なきに非ず」云々、及び「典學征伐」云々の文字あるを見れば、記者の意向知るべき也（附録第一を見よ）、天下を三分して其一を保つとも云ふべき日日新聞に至りては則ち特に「基督教徒對井上哲次郎氏」と題せる社説を以て井上博士の僻見を矯して曰く、

「井上氏は基督教を以て一國の國體及び其人民の國家的觀念を死滅せしむる者となし、基督教徒は歐洲古今の例に徴して其非なるを辨ず、是れ論争の一點なり、基督教は人類社會を基本として教を立て、之が汎愛を以て第一義とすること誠に井上氏が言ふ所の如し、然れども之が爲に決して各國特有の國體及び其人民に存する國家の觀念を死滅せしむる事なきは實例の昭々たる亦基督教徒の擧ぐる所の如し、斯の如く明快に論斷して後、井上氏が「教育勅語」を以て宗教を排除するの非なるを指斥し、終に其特質たる有力の文字を以て「吾曹は取らざるなり」と論結したり（四月七日の同新聞）、

固より彼は基督教の機關に非ず、又基督教と縁故ある者にも非れば、該教のために「護

法論」を著したるに非ず、只天下の耳目を以て自ら任ずる新聞記者の本分を盡さんと  
して、斯くは眞理のために口を開きし也、

國民新聞は其不羈獨立不偏不黨を以て名高く、其自由平民主義を以て日本國民の良友たるものなることは天下に隠れ無き事なるが、四月十一日の紙上に某氏の公開狀を掲げて、此の大問題及び大議論の曖昧に没し去るべからざることを諷したり、

其翌日報知新聞「該新聞紙が如何なる性質の者にして如何に社會に勢力ある者なるかは何人も明かに知る所なるが故に單に其の名を掲ぐるを以て足れりとす」は「井上哲次郎氏と高橋五郎氏」と標して實に左の一文を公やけにしたり、

「彌勒博士とは鼎軒若翁の贈りし綽名、通稱井上哲二郎氏、巽軒君は曾て英國の碩儒スペンサー翁と論戦して翁を尻込せたりと誇稱せし大哲學者なり、然るに頃日高橋五郎氏が偽哲學者なりと罵りてより學者社會に一大珍事こそ現はれたるが、其起りは博士が繼に「教育と宗教の衝突」と題する一篇を草して痛く基督教の事を論ぜしにあり、後ら幾日ならずして國民之友第百八十五號に高橋五郎氏は「偽哲學者の大僻

論」と題する一文を掲げて博士を攻撃したるに、博士は公開書を高橋氏に送りて休戦を乞へり、其要旨は左の如し、

自分の文は未だ完備せず、且つ引例中不確なるものあり、追て正誤致す筈なれば、君の御批評は其上にて充分被成度候、

此休戦狀國民之友紙上に現れしより、端なくも此の事世人の談柄となり、去る七日の「自由」は學者界の一珍事と題して該休戦狀の魂膽を發き始めたり○○○○○○○○○○又東京日々新聞も去る八日の紙上に「千古醜事」と題して曰く、

「異軒博士大に基督教を論じて物議を起す、忽にして陳謝百方叩頭泣拜前首を消殺し來る、吁嗟學者言を立つるや須く巖石を劈透するの勇なかるべからず、博士の如きは千古の醜をなす者也

と罵倒せり、余豈は井上氏にも高橋氏にも恩怨あるものにあらざれども、事の成行を按ずるに、井上氏の休戦狀は卑怯の如く思はれ、高橋氏の○○○○○○○○は井上

氏を死地に陥れしものと謂ふべし、

其辭甚だ穩かなるが如くなれども、其全軀の語勢を稽ふれば報知記者の意もまた言外に明かなるは、具眼者の齊しく洞視せる所なるべし、

其他中央新聞の如き血氣の新聞紙もまた同様の辭氣を以て該休戦事件を讀者に報道することを辭せざりき、

以上列記せる所は所謂大新聞紙中の錚々たる者なるが、所謂小新聞紙「之を」小」と名くるは價值の上より言ふに非ず、其以前是等の新聞紙が皆紙幅の狭かりしより出たる者ならんと信ず」に至りても亦其狀前者に異る無し、例へば改進黨新聞は該件を評して實に左の痛切なる語をなしたり、云く、

「思ふに高橋氏は甘んじて該駁論の續稿を火に投ずるが如き事は無かるべし、萬一氏にして彼の醜醜極まる仲裁に甘んずるが如き事あらば、余豈は井上博士の淺陋を笑ふと同時に高橋氏の女々しきをも笑はざるを得ず、

改進黨記者の精神は知るに難からず、誠にはれ眞理を愛する者の直言として敬重すべき

者と思はる、

此事件に於て井上博士が如何に其博士たるの體面を傷つけて世間の輕侮を蒙むるに至れるかは、都新聞を一瞥せば明白なるが如し、即ち同新聞紙上に諷刺家筑水生は左の文字を大膽にも掲げ出せり、曰く、

「井上博士は深士に非ず、何事も其表皮を見て其根底を究めず、究めざるも究めたる心地にて濟まし去るは博士として當然の事ならん、殊に教育と宗教の衝突てふ一文に於て吾輩は君の太だ博からざるを見る、或は是れ博士の稱號にすら愧る所なきや」

此に至りて井上博士の名譽すでに地に落ちたりぬ、嗟嘗て天にまで擧げられし哲次郎今は陰府にまで墮されたり、我が名譽ある大學は尙も此人を容るゝ餘地あるや、不審し、余輩は反對者ながらも此憫むべき學者のため、幾滴の涙なきを得ざる也、然し乍ら眞理は重し、「大義滅親」彼一たび悔悟して未だ悔改せず、却つて詭辯遁辭を逞しうして飽までも其非を遂げんとす、余輩焉んぞ江湖に對する義務としても關邪の戰爭

——所謂破邪顯正——に従事せざるを得んや、

余輩は信ず世間公平無私の觀察者は余が斯の如く井上氏に北庄に追迫るを見て無慈悲の所行とは決して見做さざらん、何を以て之を知るや、上に掲げたる自由新聞、改進新聞等の期望を外にしても、本月四日の毎日新聞善く之を余輩に教ふるあるを以て也、即ち彼の正論讜議百年一日の如くなるを以て世に重んぜらるゝ毎日新聞は本論の第一回が此の三日に公やけにせらるゝや、其翌日直ちに痛快の文字を以て余輩の所論を看客に報道したり、但し其報道たるや余自ら之を引用するときには江湖に對して謙徳を缺くの嫌あるが如き者なるに因て、此には只其題號のみを掲げん、曰く「高橋五郎氏と井上博士(博士顔色なし)」と、其餘は言はずして察知せらるべし(附録第二を見よ)、  
諸是の如く世間の具眼者、江湖の有識者は既に井上氏が所論の偏僻なるを看破せり、否な井上氏自身もまた一たびは其非を悟りたり、然れども彼は公然と其説を改めたりとは言ふ能はざる義理あるに似たり、大新聞界に割據して四鄰に威を振ふ「國會新聞」は四月廿一日の紙上に報じて曰く、



出版前、佛教徒より二千部を購求するの豫約ありき、之より外に言ふべき事なし、勅語衍義に繼で斯の著あり、面白き限りにこそ、」

右の報道をして眞ならしめば、井上氏が佛教徒「佛教徒とは言へども大内、島地、南條、菅、井上圓了等の諸大家は無論此中に在らざる事と確信す」に尊信せられたるや極めて深しと謂はざるを得ず、然るに今俄かに公然と（隠然とは改めをれども）其説を改めたりと言は、復何の面目ありてか彼等二千の倚頼人（Oleas）に對せんや（附録第五を見よ）。

是に於てか彼は今、——其刊行せる冊子中にては序文と附録とを以て大いに前説を改めざるにも拘はらず、——演説上に雜誌上に頻りに斷言して曰く、我は毫も前説を改めずと、是れ如く彼は毫も眞理を愛するの心なし、他語を以て之を言へば、毫も哲學者の精神なきなり、今其一例を擧んに、嚮に彼は其本論中に佛教を褒めて「多神教たる佛教は古來温和なる歴史をなせり」と明記せり、故に余茲之を駁して佛教を多神教

と稱へたる無識を笑ひしに、彼も少しく曉れる所やありけん其去月廿四日の學藝雜誌に投載せる「餘論」及び刊行の本書中に左の如く論ぜるを見る、

「佛教は本と萬有神教なれども、後世に及んでは多神教の姿をなせり、然るに我邦古代の宗教も多神教にして兩者の中互に相類似したる者多かりし故、兩部習合も起り、本地垂迹の説も出て、佛教は漸次に同化するとをも得たり、然れども耶穌教は是等の性質を缺くが故に我邦に同化すること最も困難なり」云々、

此等の辭を以て井上氏は暗に佛教を褒め、隨つて耶穌教を貶せり、耶佛の優劣は別問題として、單に其同化云々を論せん、井上氏が斯の如く佛教の同化を褒ること最も奇怪なる者なれ、——佛教若し果して萬有神教ならんには、其多神教となりたるは之が腐敗に非ずして何ぞや、隨つて其兩部習合本地垂迹の如きは腐敗の又腐敗たるや言を俟たず、されば此の同化は佛教の眞面目を失ひて後に成したる同化と謂はざるを得ず、是豈他を教化せんとして却つて自ら教化せられし者にあらずや、若し果して是の如くなりせば佛教東漸の目的は何處にありや、是れ木乃伊取る人が自ら木乃伊に成り

たると一般にして、毫も世に益する所ある無し、是の如き腐敗墮落の結果たる「同化」を噴々稱道するは果して哲學者の精神なるか、是れ果して眞理を愛する者なるか、其眞理を愛せざる者なることは三歳の小兒も亦能く之を知らん、哲學者にして哲學者の精神——眞理を愛するの念——なきは、猶是れ鹽にして其味を失ひたる者の如し、路に棄られて牛馬に踐まれん耳、否な更に是よりも甚だしき者あるを見る、鹹味を失ひたる鹽は假令用なきにもせよ、少なくとも無害なり、而して稀には肥料の一分とも或は成らんか、之に反して眞理を愛せざる哲學者は唯に無用の長物たる而已ならず、また積極的に有害なり、是れ其曲學を以て世間の人々を惑すを以て也、井上哲次郎氏が今般の舉動は全く鄙語に所謂味噌の味噌臭き者なり、未だ以て眞の味噌と稱するに足らず、只鼻につきて人に忌まるゝ而已、

井上氏が自家の目を以て視る能はず、自家の心を以て思ふ能ざるは全く此の精神的不遂症に起因す、前にも言へる如く彼は斯の如く其精神健全ならざるが故に、屢々事理の輕重を顛倒して自ら其然るを知らず、往々是非を混同して頻りに妄言謔語す、彼は自ら無證據に基督教徒を不孝不忠不義の惡臣民なりと斷言せり、而して基督教徒中に憤然として之を反駁する者あるを見れば、「自ら宗教家なりと誇る者の口吻に似ざる也」(第二頁)など言ひて之が口を箝せんと計る、是れ彼が最初よりの慣用手段なりしが、余輩が正々堂々と是非を筆戦に決せんと試むるや益々女々敷くも人身攻撃人身攻撃と叫びて援助を四方に求む、其卑怯の體たらく宛がら手弱女が力争に苦みて人殺人殺と叫ぶが如し、知らずや人には義怒あることを、知らずや眞理の爲に戦ふことは人たるの本分なることを、故に佛教にては忍辱を以て六波羅密の一と爲せども、尙破邪顯正の鐵錘を振ひて外道の異端を打敗ることを辭せず、護法の筆鋒を鋭くして佛教の陣營を攻撃することを猶豫せず、今若し佛教徒に向ひて爾は忍辱を躰すべき者なれば我が不法の打撃に甘んじ服せよと言はゞ何如ん、此の狂人黙まれと罵りて之に棒をくらはせざるは殆ど稀なるべし、彼も亦ヨウリオン帝(Julian)の轍に倣はんとするか、昔ヨウリオン帝中ごろ基督教を棄て、ニブール(Neobuhr)が言へる如く愚かにも極然なる異教を舊宗教の墟址に建てんと試みしが、該大羅馬史家が確言せる如く、「輔弼

の閣臣及び若干の内廷學者を除きては全帝國中に五百人の信者だも有らざりし」故に、不義の干戈を以て基督教徒を壓絶せんと欲し、異教徒をして基督教徒を毀害損傷せしめ、後者の來り訴ふるあれば嘲弄的に答へて曰へらく、汝等は愛を以て心とする者宜く忍びて冤苦に耐ふべしと、マウリアン帝は民權の未だ發達せざる舊天地に在りて一天萬乘の尊位に坐して之を行なひたるが故に、縦や其天爵は意外の邊より靦面に報い來りしにもせよ、人盛にして一時は天に勝つを得たり、然れども此の自由の天地に在て誰か井上哲次郎氏の如き人に羅馬の榮紉を再演せしめんや、實に是れ其類を知らざるの甚しき者にして、適己れの淺慮を披露するのみ、

余輩は鄙劣なる者と雖も、眞理の爲に聊か論ずる所あらんとすれば、其緒論として勢ひ論者の精神と論法に論及せざるを得ず、是の如きは決して人身攻撃といふべき者に非ず、縦や此にも數千歩を譲りて余輩が激論の中に幾分か廣義に於て人身攻撃を含むとするも——如何となれば人の論説を駁するは其人を敵手とするなれば皆人身攻撃といふを得なければ也——國會新聞の評の如きは井上博士を慚死せしむるに餘りあ

らん(該新聞社には三宅志賀の兩先生あるが故に其記事論文をして九鼎の重を有せしむ)曰く、

「人身攻撃は君子の間に行はれざるか、爾か言はんぞ欲する者は、爾か言ふとを得ん、然れども人身攻撃を爲せるが爲めに價値を墜す者は、人身攻撃をなさずとも價値なきなり、人身攻撃を被れるが爲めに價値を墜す者は、人身攻撃を被らずとも、價値なきなり、人身攻撃の効驗あるは、初めより弱點あるなり、若し内に疚しきと無く、屹然として立つとを得ば、百千の人身攻撃、宛も浮雲の山嶽を掩ふと一般、憐むべきは人身攻撃を恐るゝ徒にぞある(四月十二日の同新聞尙附録第三を見よ)、斯の如く井上氏が言ふ所は唯だ手弱女の泣言めける而已ならず、又極めて訴情的なる者にして、腐爛なるは水道の樹の如く、管見なるは井底の蛙の如し、筑水生眞に人を誣ひざる也、」

井上氏曰く(百十二頁)、

「耶穌教徒の學校に限りて或は英和學校或は佛和學校と稱す、何故必ずしも英佛を

先にして日本を後にするや、……是れ全く耶穌教國を重んずるの心より出づる也云々、

何ぞ其老婆の愚癡に似たることの太甚きや、國名の先後は其主とする所に由て決す、佛人の來りて佛語學を教へんとし傍ら日本語學をも教へんとするあらば、佛和を以て其後に命ずべし、是れ正當の所爲なり、日本語學を第一に教ふることは日本人これを爲すべし、是れ佛人の爲し得ざる所なり、佛人は佛語を教へんために來れる也、然るに其傍に日本語をも併せ教ふるは則ち日本國を重んずるに出たる者にして、寧ろ殊勝とこそ謂つべけれ、然れば又英和、魯和等の名稱あるも決して咎むべきに非ず、然のみならず、井上氏が「耶穌教徒の學校に限りて」云々といふは盲目者の誣言なり、單に京濱の二處を搜しても彼が盲を明かにすべき實例に乏しからず、何ぞ狂愚の甚しきや、此の如く彼は淺慮薄智なるが故に、往々自殺的の斷言をなして自ら其然るを知らず、請ふ左に之が一二を擧げて讀者諸君の頤を解かん、彼曰く――

「耶穌は元と國民の上に脱出し自ら萬國普通と認むる所の教を開きたる也、是れ實

に耶穌教が勅語と相合はざる所以なり」云々、

此語は哲學者の口より出ださるべき者に非れども、其事は姑く想して之が言意を吟味せんに、國民の上に脱出したる萬國普通の教とは、即ち天下の宗教 (World-religion, Weltreligion) といふに同じくして、實に是れ古來世界の學者が基督教に與へたる最大の諷刺なりとす、之を以て基督教の缺典となさんとするは自殺的にあらずして何ぞや、且又萬國普通の教なるが故に我が國に行ふべからずとは奇怪千萬なる論法に非ずや、天下何れの處にも善く行なはるべき者なるが故に天下の宗教とは言ふなり、水素と酸素を一八の比例に包含すれば水を成すとは天下の真理なり、天下の真理なるが故に我國に通ぜずと言はば、是れ天下の真理なるが故に天下の真理ならずと云ふと何ぞ異ならんや、是をしも狂人の癡言と言はずんば何をか然か言ふべき者あらん (但し此事につきては後に重ねて論ずる所あらんとす)。

次に彼は今日已に陳腐に歸して誰も讀まざる安井息軒の「辨妄」を引きて淺薄にも得意げに左の如く己が無識を天下に廣告し、延て暗に我が祖國を侮辱せり、曰く、

今也以君父爲假、別有眞君眞父尊於君父者、以耶穌之故、獲罪於假君父、眞君父深愛之、爲之指天  
上之誓、其受罪益甚、榮之益大、以此導民、民亦無復所畏懼、凡可以利己者、何事不爲、是以奉其教  
者、皆背君父、不敬遂耶穌之教、寧害肉身百年之命、不敬失天上無窮之榮、感感至此、刑罰不足  
以感之、罪惡不足、以動之、爲之君父者、不亦難乎、(辨妄二)

耶穌の言能く耶穌教の眞實を證し得たるものなり、總て耶穌教國の民は耶穌教の影響を受け、忠孝を重んず、  
忠は佛語にて「ロワイロータ」と云ひ、英語にては「ロヤルチー」と云ひ、獨語にては「ロヤリター」と云ひ、伊  
語にては「レヤルタ」と云ふ、然れども是等の語は元々佛語の「ロワー」(法律)より來れるものにて、純粹なる忠  
誠の義よりも寧ろ法律的服従の義勝てり、且つ彼國の學者は古來決して之を以て重要な倫理と見做し  
たるにあらざるなり、又孝は羅句語の「ピエタス」より導き來り、英語にては「メイエチー」、佛語にては「ピエ  
タテ」、獨語にては「ピエターテ」、伊語にては「ピエタ」を云ふ、然れども此語は其意味甚だ漠然として、或は信心或  
は愛國或は愛友或は孝心を意味するもあり、故に單に「ピエタス」と云ひたりて必ずしも孝心の事ならず、大  
抵は信心の意なり、純粹なる孝を云へる單一語は西洋に之れなきなり、是れ其孝を重んぜざるが爲め、孝を云  
へる單一語の必要なかりしに由るなり、然るに印度には却て之れあり、「サアトサリヤ」(Vasalya)を云ふ、日本  
は支那の孝を云へる語を養ひ取りたる故別に自國にて作爲するの必要なかりしなり、

嗟何ぞ其淺薄無識の斯くも大いなるや、余輩は愈々筑水生が言の的中せるを見る也、  
「耶穌教國の民は忠孝を重んぜず」との証言につきては、上にも(本書第二十五、二十六

頁)辨せし如く、後にも尙委しく論ぜんとすれば、此には只忠孝と二語につきて彼  
が驟見を矯すらん耳、固より余輩は西洋の國語のために無用の辨議をなさんと試む  
るに非ず、只井上氏が餘りに無識にして我が大學の恥辱たるを見て、眞理のために一  
言せざるを得ざる也、

彼また例の語學自慢を出して曰く、「忠」といふ語は佛語にては何、獨逸語にては何等、  
而して「此等の語は元々佛語の「ロワー」より出たる者にて、純粹なる忠誠の義よりも  
寧ろ法律的服従の義勝てり」と、但し彼の佛語「ロワー」(Loi)は上古よりして存せし者  
に非ず、奚ぞ今少しく昔に溯りて考へざりしや、ロワーは拉句語の「レキス」(Lex 即ち  
法)の轉訛なること遠く求めずとも一たびウエフストルを開かば明らかなるべし、然  
らば上古より中古にかけて、此語(ロワー)の未だ成らざりし前には忠君と云ふ者全く無  
かりしや、何ぞ其れ然らんや、其ありしや疑を容れず「但し此等の事は基督教に大關  
係ある者にあらずとも世人を誤るを恐れて一言する耳と知るべし」、然らば何の語を  
以て此の觀念を表せしや、曰く拉句語の「フヂダス」(Fides)若くは其轉訛語を以て之を

表せし也、フナフスとは元來裏誠の義にして、又忠君の義にも轉用せり、因て歐洲中古封建時代に於ては忠君の義をフナフルテ (Fealty 英佛伊斯等大抵皆同じ) と云ひ、並にアルリイツアンス (Allegiance 英佛等同じ) とも亦稱したり、是の如く忠君といふ文字はロヤルテ (Loyalty) の外にも多し、獨逸にては裏誠をトロフ (Trene) と稱ふるに因て又た忠君を自國の語にて Unterthanentreue と稱ふ、其事實すべし是の如し、是にても尙井上博士は其博士てふ名のために愧死せざるや、

然らばロヤルテてふ文字は果して井上氏が言ふ如く單に法律上の義務のみを指して蓋も君主に忠誠を盡すの意を有せざるや、何ぞ其れ然らんや、此の文字が法(ロヤル)或は法律てふ語より出たるは是れ却つて社會の進歩して自由てふ思想の漸々に明かになり來りしを表すと謂ふべし、ロヤル (即ち Loi) は必ずしも制定法律のみを謂ふに非ず、天理、本分、權柄、權等其意義一ならざれども、假令之を法律の義と見做して説をなさんに、佛蘭士の名士アラン、フランク (Ad. Frank) 氏が國家を論ずるに當りて述たる語これを解くに餘りありとす、即ち曰く、

「國家は有機物なり、……他語を以て之を言へば是れ法律に由て結成せる社會なり、……法律なければ、號令する人は擅制主たる而已、而して服従する人々は奴隸たる而已」(Un Etat, c'est un corps organisé……; c'est une société réunie sous les lois… En l'absence des lois, celui qui commande n'est plus qu'un maître, et ceux qui obéissent ne sont plus que des esclaves.)

此言意を味はらば必らず思半に過るあらん、

井上氏果して忠といふ者の何たるを知るか、忠は衷なり、忠誠は衷誠なり、即ち「衷とひる」也、「めかきこころ」也、因て支那の忠(中心曰)忠、内盡其心而不欺也)も、泰西の忠も、我國の忠も、皆本は只「めかきこころ」を謂ふる者にして、之を君主に對して盡せば所謂忠君てふ者となる也、嗟井上氏の如きは藪を衝て蛇を出せる者なり、我輩は却て支那に對し泰西に對して忸怩たらざるを得ず、論じて此に至れば再び井上氏の淺薄無識を笑はざらんとするも能はず、

次に「孝」といふ語に至りても余輩は同様の語氣を以て井上博士を遇するの外なからん

とす、  
井上哲次郎氏の議論は聖經に所謂愚人の建たる家の如し、沙を以て基礎となせり、一たび大風の吹き來るあらば忽ち地に倒れんこと自然の數のみ、否な本月十一十二兩日に「自由新聞」が其社説を以て局外より論斷せし如く、彼が「本陣は早く既に動き立てるを見る」也、余輩をして之を評せしめば、敢て言はんを、自由記者の筆端より生ぜし颯々の風既に井上博士が屋下の流沙を吹き飛ばしたれば、之を覆へさんには、今は早やサムソンの來り推すを要せず、巾幗の織手これに觸るれば則ち足る也と（附録第四を見よ）。

意ふに目的と手段——勞と功——失と得とは幾分か相應するを尙ぶ、蝦を以て鯛を釣るすら人これを笑ふ、况や虎を描いて猫となるをや、井上氏が今般の著述は虎を描んとして計らざる猫を成せる也、此類の所爲を評して羅馬の大詩人ホレス(Horace)は Parturiant montes, nascetur ridiculus mus (詩術論 Ars Poetica 第百三十九行) と歌ひ、有名の佛國詩人、同じく詩術論 Art Poétique の作者なるボラン(Bollean)は

之を譯して La montagne en travail enfante une souris と和せり、余は何の文字を以て此の好句を和譯すべきかを知らず、只是れ「山が産をして鼠が生れた」といふ伊蘇普噺言より出たりと言はん而已 (Athenaeus の Deipnosophistae 第十四卷にエマント王タニコスもアゲシラウメに向ひて此の諺を用ひたるを見るとは雖も)。

然るに斯る薄弱の議論を眞面目に辨駁し行かば、恐らくは狂人奔れば不狂人も奔るとの評を免かれざらん、兎に角雞を割くに牛刀を以てする者なるや疑なしと謂はざるを得ず、然し乍ら論者は隱に他を代表せる者なること已に上に陳べたるが如くなれば (附録第五を見よ)、請ふ余輩をして十分に愚見を吐露することを得せしめよ、

井上博士曰く「西洋の孝は拉甸語のピエタスより出で來り、英語にてはパイエチー、佛語にてはピエタ、獨語にてはピエタート、伊語にてはピエッタと云ふ、然れども此語は意味甚だ漠然として或は信心或は愛國或は愛友或は孝心を意味することあり、……大抵は信心の心なり、純粹なる孝といへる單一語は西洋に之れなきなり、是れ孝を重んずるが爲めなり」云々と、拉甸語のピエタス (Pietas) は希臘語のイウセマイア

と同じき者なるは上に説けるが如くにして(本書第二五六頁を見よ)、共に是れ衆徳の源、萬善の本、百行の首たるが故に、唯に井上氏が列擧したる意義を有するのみならず、又其他にも之が第一の本旨として「本分を盡す事」、また之が第四第五等の末旨として忠貞、赤誠、慈悲、憐憫、公義等尙種々の意義をも含むを見る、是れ其萬徳の基たる所以にして毫も怪しむを須ひず、恰も支那の「孝」といふ語が孝經などに見えたる如く「徳之本、教之所由生」にして、唯に肉身の父母に事ふる事を謂ふのみならず、又天子章、諸侯章、卿大夫士章、孝治章等に見えたる如く尙種々の道徳善行を包含するに等し、此點に於ては此二語の歴史粗暗合す、井上氏は未だ此事を學び知らざる也、但し此の如く此等二語の歴史は五十歩百歩の差なれども、其字義自身の優劣に至りては余輩は残念ながら「ピエタス」を數十等も「孝」の上に位せしめざるを得ず、試みに思へ、支那の孝は元來何の義なるぞや、是れ「老」と「子」との相合して成れる文字にして、其觀念は即ち子女が老父母を養ふに出たる者なるや一點の疑を容れず、故に古代よりして支那人は動もすれば此の觀念を極端に擴めて父母に敬禮を缺くに至れり、

故に孔子は此過を責めて曰く、今之孝者は謂能養、至於犬馬皆有其養、不敬何以別乎と、又曰く生事之以禮、死葬之以禮、祭之以禮と、——ピエタス(Pietas)は即ち之に異なり、人たるの本分(即ち道)を盡すといふの觀念を以て根本とす、故に此中よりして天帝に對する畏敬の念(敬天)出で、父母に對する敬事の念(孝行)出で、父祖の國に對する愛愛の念(愛國)出で、隨つて忠貞仁慈等の諸情湧出す、英佛獨伊にて用ふるパイエタ、ピエタ等の如きは此貴き拉甸語より出でたり、何とて井上氏が妄想する如く輕き語ならんや、且又井上氏が之を指して「單にピエタスと言へば大抵は信心の意なり」と斷言したるも例の盲説にして取るに足らず、例へば獨逸語にては之を孝養敬愛等の意に常に用ふれども、信心敬天等の義には多く用ふる所ある無し、即ち獨逸人にむかひてピエタート(Pietaet)と言はば彼等が第一に起す所の者は概して孝(kindliche Liebe)と云ふ觀念なるに等しからず、故に獨逸書には常に Pietaet gegen die Eltern (孝) gegen die Obrigkeit (忠或は官府に對する衷誠)、其他 Pietaet gegen die Lehrer, gegen die Pastoren 等も用ふれども、敬虔の徳をば常に自



國の語を用ひて *Froemigkeit* 即ち *Frömmigkeit* と稱す、彼の *kirchliche Pietät* (直譯教會的忠順)の如きも敬虔若くは信心の義に非ず、井上氏請ふ混同する勿れ、官費にて多年獨逸國に留學せし人にして斯の如き事實をだも知らざるは、唯に其博言家たる名に愧づべき而已ならず、之に資金を給したる吾人日本人民全躰に對して不面目の極みならずや、

斯の如く例へば獨逸人は *Herr* とてふ一語を以て子が親に對する愛敬の情を表す、請ふ試みに獨逸字書を取て開き見よ、但し此情 (*Gefühl*) は必らずしも一語を以て之を表するを要せず、請ふ近く我國に例をとりて井上博士の蒙を啓かん、我が國人は古來忠孝〔狹義に於ての忠孝〕の情に厚かりしと吾人が誇る所なり、大伴の家持が筑紫に防人として出で往く東國男兒を歌ひて、

……まげのまにまに、たらちねの、母が目かれて、若草の妻をもまかす、  
……ますらすの、心をもちて、ありめぐり、云々

と讚めたるは更にも言はず、是も亦萬葉集に或る人が「感へる者を論す」とて、

ちんはしを、見れば貴とし、妻子みれば、めぐしうつくし、世の中は、斯ぞ倫理、  
もちどりの、云々

と詠めたるが如きも、皆これ親子の情の深きを言ひ顯はせしに非ざるは無し、然るに我國には古來自國の語に孝といふ詞なきこと忠といふ詞のなきに同じ、但し斯の如く其詞は即ち無しと雖も、其情は却て十分に有りしこと上に掲げたるが如し、若し井上氏の如く二語を以て表する孝は眞の孝に非ずと謂はば、此情を表すべき言語文字の皆無なる民族の孝は嗟之を何と言はんや、故に我輩は書けり井上氏は「延て暗に我が祖國を侮辱したり」と、斯の如く一方にて己が父母の國を誣ひながら他方にて我は忠孝愛國の化身なりと誇るども、誰か其癡言を信せんや、何人か其淺慮を笑はざらんや、井上博士の議論は此にても亦大自殺をなせり、

按ずるに支那に於ても孝の字は始終一箇にして一切の用を辨せしに非ず、孝行、孝順、孝心、孝道等一にして足らず、吾人が平生口にする孝行は即ち二語或は二字より成れる者にあらずや、今英語に照して之を論ぜんに、彼が所謂 *Filial*、*Paternal*、*Maternal* (Filial

piety) は孝道に當り、ピエティ、フィリヤル、フィリヤル (Filial conduct) は孝行に當り、ピエティ、フィリヤル、フィリヤル (Filial obedience) は孝順に當り、ピエティ、フィリヤル、フィリヤル (Filial disposition) は孝心に當る者なり、而して泰西の語は却て形容詞の上に於て支那に凌駕すとも謂つべし。支那にては父母に善く事ふる子を單に孝子と言ひ得る而已、然るに泰西にては斯の如き子を美稱すべき種々の語を有す、例へば Filial son, obedient son, dutiful son 等の如し、支那にては順孫おれども未だ順子あるを聞かず (家語)、實に斯く孝の一字獨り場を擅にすと謂て可なるが如し、  
 諸此の如く長短を計較し始終を觀察するに、此の點に於ては、單に言語文字の上よりしても、泰西は決して支那に對して遜色を呈する無く、却つて他の理由上よりして遙かに支那に凌駕する所あるを示す也、

一たび論じて此點に達すれば、余輩は此に井上氏が斷言せる謬妄——耶穌教國の民 (他語を以て言へば、即基督信徒) は忠孝を重んぜず、隨て不忠不孝の臣子なりとの斷言——を辨破せざるを得ず、

今此に論じ來れるは孝に關する疑問なり、孔夫子も論語に「孝悌也者其爲仁之本與」と宣べられたる而已ならず、——孝經に「前にも引ける如く」孝者徳之本也とも説かれたる而已ならず、其自然の結果として又「君子事親孝、故忠可移於君」と教へられたり、故に曰く求「忠臣」必於「孝子之門」也と、因て余輩は先づ「孝」よりして論端を開かんと欲す、固より余は悔悟せる哲學者に示さんとて之を言ふに非ず、只彼が悔悟前に誤まりたる衆多の同胞兄弟のために其惑を解かんと欲する也、井上氏に向ひては只一言を呈せん、夫れ忠の何たるを知らずして頻りに忠々と言ふは鼠群の嗷嘈のみ、孝の何たるを辨へずして頻りに孝々と言ふは雞群の喧鬧のみ、一國の博士たる者之を學んで豈可ならんや、

孔子は實に天下の大聖人なり、我輩凡庸人もとより之を非議するの權なし、然れども之を基督、保羅、釋迦、迦葉、ソクラテス、プラト、グロアストル、マホメット等と比較して愚見を陳ることは吾人靈知の動物として當然に之を能くす、熟惟みるに孔子が孝を以て萬善の本、衆徳の源となしたるは、實際的には甚だ美なりと雖も、之を釋

迦若くは基督の見に比すれば、其着眼の一等を降るを認めざるを得ず、孝は即ち父子の道にして五倫中第一に始まる者なりとは雖も、是れ「天性」より發する善徳の一たるに過ぎずして、他の善徳の本源とは稱すべからず、否な他の點より觀察すれば、實に抱朴子が其外篇弭訟の卷に姑子劉君士由之論として掲げたる如く、人綱始<sub>二</sub>于夫婦<sub>一</sub>判合擬<sub>二</sub>于二儀<sub>一</sub>、是故大婚之禮、古人所<sub>レ</sub>重、將<sub>レ</sub>合<sub>二</sub>一姓之好<sub>一</sub>以來、祖宗之基とも亦説きつ可し、故に佛教より出たる俗説として「親子は一世、夫婦は二世」てふ謬廣く行なはれ、父子之道は動もすれば夫婦之道のために其光輝を奪はれんとせり、——何ぞ一步を進めて遠觀する所あらざるや、余は此に孔門自身の信念と持説とを以て論證するあらんと欲す、

孔夫子自ら明言して曰く「父子之道天性也」と、敢て問ふ「天性」とは何物ぞや、子思幸ひにして吾人に教ふるあり、即ち曰く天命之謂<sub>レ</sub>性、率<sub>レ</sub>性之謂<sub>レ</sub>道と、朱晦菴之を解説して曰く、

子思述<sub>二</sub>所<sub>レ</sub>傳之意<sub>一</sub>以立言、首明<sub>二</sub>道之本原<sub>一</sub>出于天而不可<sub>レ</sub>易、其實體備<sub>二</sub>於己<sub>一</sub>而

不可<sub>レ</sub>離、……蓋欲<sub>レ</sub>學者於<sub>レ</sub>此反<sub>二</sub>求諸身<sub>一</sub>、而自<sub>レ</sub>得之、以去<sub>二</sub>夫外誘之私<sub>一</sub>而充<sub>二</sub>其本然之善<sub>一</sub>云々

要するに是また余が本論の首(第二十五頁及び二十六頁を見よ)に引きたる王陽明の見にして、善く基督教の旨を得たる者と謂ふべし、天——即ち耶穌教に所謂神(眞神或は上帝)——より出たる道徳を印せるを天性と稱す、然らば哲理上吾人は衆徳萬善の本を此に求めざる可らず、昔しパリサイ宗の一教法師イエス、キリストを試みんとて問て曰く、「師よ經典の中何れの誠か最も大いなる」、イエス答けるは「心を盡し精神を盡し意を盡して爾の神を愛し奉るべし、是れ第一にして最も大なる誠命なり」と(馬太福音書第二十二章三十六七七八節)、而して此の妙答は實に申命記(復傳律例)第六章五節に基づけり、此れ即ち永遠無窮萬古不易の眞理にして、靈知なる人類が天帝に對する無上至大の關係(Beziehung)を謂<sub>レ</sub>る者とす、此關係を古代の猶太博士(即ちラビ)は希百來語にてハミドウス(Khasidouth 即ち虔信)と稱へ、又更に之を名けて Khobath adam lelohaiiv (人類が神に盡すべきの道)と曰<sub>レ</sub>り、此觀念を希臘語にてイ

ウゼベイン (Eusebeia) と曰ひ、拉句語にてエウキヌスと曰ひしに因り、基督教にては此等の語を採用して之に加ふるに更に幾層深奥なる意味を以てするに至りぬ、英語のバイエラは此エウキヌスより轉化し來れる也、但し此イウゼバイアを又一に「Theosebeia」と稱するに因り英人はまた Godliness を以て之に名く、佛獨等もまた大差ある無し、即ち佛蘭士語の Piété、獨逸語の Gottseligkeit 等此類なり、ハーレンス (Harless) 其「基督教道徳學」と題する書——即ち僅か三百頁ばかりの小冊子なれども、佛國の大人名字書家ウァンプロウ氏が評して群中に傑出せる大著 Une des plus importantes productions de ce genre と稱讚したる Christliche Ethik——の中に説き曰く「基督教徒は自然に其拯救(即ち罪惡を脱離して新人に更生したる事)を認めて以て人間一切中の最大事件——無上の關係を爲す、此の認識と俱に基督教魂なる者 (Christliche Gesinnung) 生ず、……是を以て基督教の道徳は無二無上の究竟關係を有す、此究竟無上の關係あらざれば、道徳にして眞の道徳たる者なく、他の諸道徳は皆萌芽を此中に藏す、但し此の萬徳の徳は何ぞや即ち是れ基督教の虔信なりとす」(… So hat die

christliche Tugend nur eine letzte und hoechste Beziehung, ohne welche keine Tugend Tugend ist und in welcher alle andern Tugenden wie in ihrem Keime liegen. Diese Tugend aller Tugenden aber ist die christliche Froemigkeit.)

獨逸の哲學界にハーレンスよりも一層不朽の名を留めたるローネ (Rothe) もまた其「神學的道徳學」——「Theologische Ethik——」の中に同様の事を一層精密に縷々辨明する所ありたり、其一節に曰く(第一卷四百六十一頁)——

「人類眞箇に新生するに於ては神すなはち其人に在て此の下界に化現したまふと謂ふべし (Gott kann irdisch kosmisch werden) 故に人類こそ觀念の中には其神に對する特別の關係 (spezifische Beziehung zu Gott) 自然に籠れる者とす、是則ち宗教的堅心、即ち虔信なり」(Die religiöse Bestimmtheit oder Froemigkeit)。

近くは又ドルバント大學の教授にして社會道徳學 (Social-Ethik) を以て名高きオエチマン (Oettingen) 博士も其道徳學中に明言して曰く、「眞箇の虔信は寔に是れ萬徳の母なり」(Die aufrichtige Froemigkeit ist in der That die "Mutter aller

「Tugenden」と、此獨逸文中に引用譜號を附したるは則ち彼が之を右の「ハインズより借りたるを示せる者と知るべし、

唯に神學者の此説をなすのみに非ず、政治學者社會學者等もまた此説をなす也、フナ  
ルンラン (Vollgraf) は獨逸中最小と呼ばる「マルン」大學にて政治學と萬國公法  
を教へたる者なりしかども、——又フンチエリが雜駁不精と罵りたる者なりしかど  
も、其著はしたる三卷の哲學書——人類兼國民學、及び政治兼法律哲學 (Die  
Menschen- & Volkerkunde; Staats- und Rechtsphilosophie)——はツルマン  
の大學教授ヘルド (Held) 博士が言へる如く、實に巨匠の大作にして、パツクルの如  
きは之に比ぶれば小兒に彷彿たりとも謂ふべく、永く學者間に記念的の著述として珍  
重せらるべき大寶藏なるが、其中に彼れ所謂 Humanitäts- Gefühle (人情) を善眞  
美及び虔信の四種に大別したりしも、尙再三再四説をなして曰く、「此等四種即ち德行  
哲學美術信神は實に一箇の人性より出る功用なれども、其中信神の情を以て最大なる  
者とす」(第一卷百三十六頁)、「是れ此の情は能く美術を鼓舞し、諸哲學の始及び終と

なり、且能く善心を助長すれば也」(indem es die Begeisterung durch das Goetische  
ist, welche die schoenen Kuenste belebt, aller Philosophie Anfang und Ende ist, und  
das Tugend—Gefuehl traegt und staerkt 百卅七頁)「シナイエマンヘルは一切健全な  
る情感を敬虔 (fromm) 即ち宗教的兼道德的 (religioes—sittlich) なる者と名けたり、  
實に夫の所謂道德的 (sittliche) 情感は全く是れ只虔信へと淵源より出づ」と(百二十  
八頁)。

基督教に於ては斯の如くイウセバニア即ちピエタスを以て衆徳及萬善の本とす、而し  
て此事は古今の哲學者が是視する所たる也、忠と言ひ、孝と言ひ、愛國心と言ひ、總  
て人生の美德は時宜にしたがひて此の淵源より出で来る、是れ眞箇に基督の徒たる人  
々は即ち「夫の外誘の私を去りて其本然の善を充てん」ことを務むれば也、

諸此の如く虔信、イウセバニア、ピエタスは萬徳の本なるが故に、大海が萬流を含む  
と同じく、忠孝愛國友愛仁慈等の諸義を其中に網羅す、是れ此語の缺典には非ず、却  
つて其日月と光を争ふべき功德なりとす、然るに井上哲次郎博士(嗟博士、我は彼を

博士と呼ぶを愧づ)の短見淺慮なる、得々として之を非難すべき疵瑕を爲す、是れ何ぞ衆盲が象を摸りて象は笑の如し白の如し等といふに異ならんや、豈笑止千萬の至ならずや、井上氏の此舉動たるや全く夏蟲が氷雪を笑ふの類なり、適自家の無知無識を世に公やけにする而已、

夫れ大海は萬流を含むを以て大海と稱す、大海にむかひて爾は水なしと言は、何如ん、狂愚たるの譏は辭すべからず、基督教徒にむかひて、汝は孝を知らずと言ふは何ぞ是に異ならんや、前にも言へる如く支那の孝は本と其義を子が老親を養ふに取らる者なり、然れども孔子が説かれし如く犬馬に至るまで皆能く養ふことを、敬せずんば何を以てか之を別たん、請ふ我をして基督教國たる泰西に於ける「孝」てふ觀念を描寫せしめよ、但し此事を言はんとせば、勢ひ亞細亞の猶太國より始めざるを得ず、天下の人の皆善く知る如く摩西が三千年の昔に於て神にかはりて以色列人民に授けたる夫の有名なる十誡 (Decalogue, ten commandments) の中には實に左の著しき言辭を載す、——「汝の父母を敬まへ、是は汝の神エホバの汝に賜ふ所の地に汝の生命を長か

らしめんが爲めなり、既に「父母を敬まへ」と言へば、之に事へ之を養ふ事を其中に含むは固より論なし、此句を希百來語にて Khabed eih-abikha veth-imekha *skhah* 此の khabed は Khabad (to honour; reverence, 敬まふ、尊ぶ) といふ動詞の *skhah* piel 活用、法單數男性二人稱命令體なるが故に、希百來語にては孝道或は父子之道を Khibud (キブド、即ち虔孝) と名く、(此「敬」てふ語が至極重き意味にして piety, reverence 即ち敬虔の義なりし事は猶太人が此第五の誡を吾人の如く第二類の首とせず第一類の尾とせしに徴しても明かなれども、斯る事は井上氏が夢想だもせざる所なるべし)、公平に之を論ぜんに、此キブドは支那の孝に對して決して遜色ある無きのみならず、却つて是れ孔子の精神を得たるだけ支那の孝に凌駕すとや言はん、抑も孝道の重んぜられたる事は猶太建國の極初よりして既に然り、井上氏も「摩西の五經」中に孝を教へたる文字ある事をば流石に之をレナンなどより學びて知れり(「教育と宗教の衝突」九十九頁——百頁を見よ)、然れども彼は愚蒙にして其精神をば毫も洞見せざりき、彼曰く

「余は決して猶太教中孝道の教あることを否定せず、……然れども耶穌教に至りては頗る之れと異なる者ありて存するなり、勿論耶穌教にありても孝道の教と謂ふべきもの全く之れなきには非ず、馬太傳第十九章十九節に云く敬<sup>ニ</sup>爾父母<sup>ト</sup>と、父母を敬するは是れ孝道なりと謂ふべき也」云々

是只皮相を見て得々たる者のみ、斯の如きを膚淺の徒とは謂ふ也、彼は猶太教即ち舊約中に孝道の教あることを「否定」せずして、「是れ明白なる歴史的事實なれば也」と言へり、然るに忽ち曲學の馬脚を露はして喋々すらく「耶穌教に至りては頗る之れと異なる者あり」と、知らずや汝がイエスの辭として引きたる「敬<sup>ニ</sup>爾父母<sup>ト</sup>」は即ち是れイエスが汝も知れる該十誡中の語を反覆したる者なり、之を反覆せるイエスの精神知るべき也、請ふ耳を清めて聽け、目を洗ふて見よ、耶穌曰く(馬太五の十七八九)、

「われ律法と預言者を廢る爲に來れりと意ふ勿れ、我れ來て之を廢るに非ず、成就せんとするなり、われ誠に爾曹に告ん、天地の盡ざる中に律法の一點一畫も遂つくとせずして廢ることなし、是故に人もし誠の至微き一を破り、又その如く人に教なば、

天國に於て至微き者と謂れん、凡そ之を行ひ且人に教る者は天國に於て大なる者と謂るべし」

何ぞ其言の道理あるや、唯に是のみならず耶穌はまた他處に極言して曰く、「天地の廢るは律法の一畫の廢るよりも易し」と、此「律法」とは則ち所謂 Torah トラにして摩西の律法——神の誠命を謂ふ者と知るべし、

然るを彼が如く「耶穌教にありても孝道の教といふべき者全く之れなきには非ず」、又は「父母を敬するは是れ孝道なりと謂ふべき也」などと之を輕視するは、一は福音書の何物たるを知らざる者の妄言のみ、一は道徳の何物たるを知らざる者の謔語のみ、孔子も亦聖治章に自ら宣ずや孝莫<sup>大</sup>於<sup>嚴</sup>父、又曰く聖人因<sup>嚴</sup>以<sup>教</sup>敬、註に曰く嚴は尊なりと、是れ虔信的敬愛に近しとす、因て配天、配上帝等の過大なる文字ある也、博士請ふ少しく謹しむ所あれ、イエスは當時の人々が直接に孝を問はざる時にも尙機あれば彼等が孝道の本質を失ひたるを責めし事あるは馬太福音書第十五章に見えたるが如し、井上氏は此等の文字を讀みても其意味を解せず、其眼光至鈍にして到底紙背

に透る能はず、故に十誡中の第五を讀みても其中に見えたる「約束」の何物たるを曉らざる也、余は後に保羅の大文字を引きて更に基督教的忠孝を詳説せんと欲すれども、讀者の倦怠を避んが爲めに先づ此に基督教に於ける孝道の實際に呈せる出來榮を説くべし。

前に詳論せる如く希臘語にては萬徳の本を *eusebeia* と稱ふるに因て、虔信に次では自然に孝を第一に先づ然か稱ふ、故に(例へば)パウロは孝道を子弟に教ふことをラモテに命じて(提摩太前書五の四)。

「子あるひは孫あらば先づ己れの家に孝を行ひ其親に恩を報ふことを學ぶべし、是れ神の御意に適ふこと也」

と説ける時に、*prōton ton idion oikon eusebein* (πρῶτον τὸν ἰδίον οἶκον εὐσεβεῖν) は即ち *eusebeia* の動詞として、拉西語には之を *pietatem exercere* と譯せり、是を英語にて解けば *to exercise filial piety* として、即ち「恭しく父母に敬事する」を謂ふ者とす、パウロの此語は井上氏が孟子の遷に倣ひて基督教の博愛 (*humanity*) は墨子の

兼愛然として「墨子の兼愛も井上氏が言ふ如き者ならざること已に讀者の定論ありと雖も」君父を無みするに至ると主張せる妄言を駁倒するに餘りあり、請ふ其 *prōton ton idion oikon* 「先づ己れの家に」を見よ、但し此事は枝葉の談なれば、姑く措きて此に本問題に立かへらんに、基督教に於ける孝の特質の斯く虔信的なる事は實際にも甚だ良好なる結果を生ずるに至れり、嗚呼ヒリアル、パイエテ *filial piety*、何ぞ其語の奥ゆかしきや、アドルン、フランク氏其道徳學(倫理學)中に之を解説して曰く、

「ヒリアル、パイエテ、——父母に對する順從親愛尊敬等は其斯く一情念に合したる時は殆ど虔信的(宗教的)なる狀相を呈し、吾人が萬靈衆生の天父に盡す所の禮拜に彷彿たり、是れ父權は幾分か神權の尊嚴に似たる所あれば也、故に子が其親に對して盡すべき本分義務を古來悉く此語(ヒリアル、パイエテ)の中に包含せしめたるは當然の事と謂へし」 (*Piété filiale:—L'obéissance, l'amour, le respect, quand ils sont ainsi réunis en un même sentiment, ont un caractère presque religieux, et ressemblent au culte que nous rendons au Père commun de tous les êtres, comme*



l'autorité paternelle a quelque chose de la majesté de l'autorité divine. Ce n'est donc pas sans raison que les obligations des enfants envers les auteurs de leurs jours ont été toutes comprises sous le nom de piété filiale.)

抑も樹の善悪は其果によりて之を知る、斯の如き良果を結びたる樹にして悪樹ならんとは凡そ心ある者の信ずる能はざる所なり、

是より我輩はパウロの大文章——以弗所書第六章——を掲げて、如何に孝道が猶太人中に重んぜられたるかを辨明せんとす、是れ實に興味ある大問題なれば也、井上博士は博士とばらゝとも文字を解することを知らぬ者なり、例へば彼は哥羅西書三章二十節に(支那譯)子歟、爾於凡事宜聽從双親とあるを見て難じて曰く、「兩親の言ふ事ならば如何なることも必ず之に服従すべし」と云ふは……實際上甚だしき弊害を來たすこと無しとせず」云々と、嗟又も彼は己れが無知無識にして常識だも無きことを廣告し始めたり、「於凡事宜聽從双親」とは俗に萬事兩親に従が」と言ふに同じくして、如何なる不諳にも默從せよと言ふとは語勢自ら異なり、殊に原文に於ては於凡事を

kata panta と誓けり、是れ「如何なる事にも必ず」と云ふ時に用ふる希臘語にあらん、若し後者の義ならんには hopoisoun, hopoisisoun 等若くは其類語を用ひざる可らん、況んや、右の句は只前半にして、直ちに其次に「父歟、勿激爾子之怒恐其氣餒」といふ後半の句あるをや、斯の如く常識だも無き者の惑を解かんとするは嗟また難い哉、難い哉、

井上哲次郎氏が書を読み文字を了解せざること此の如し、否な唯に然か眼光の遲鈍なるのみならず、又普通の判断力だも無きこと具さに上に説けるが如し、因て左の大問題の如きは之を彼が面前に縷陳するとも所謂「猫に小判」のみ、「真珠を豕の前に投げ與ふる」の類のみ、「恐らくは足にて之を踐み反りて其人を噬まん」、故に余輩は今江湖具眼の君子に是非の鑑別及び黑白の判断を仰ぐの外なき也、然りと雖も憂ふる勿れ我が心、世間には汝が思ふよりも具眼の識者多し、彼等は其今日まで汝に傾むけし耳を依然として今後も尙汝に傾むけん、ヘルトマンの語を以て之を言はんに、"they know so much more than the orator, and are so just!"

耶穌基督の使徒(アポストロ)中異邦人の使徒として天下萬世に其名を轟かせし保羅は其以弗所人に與へたる書翰の中に諄々恟々として左の著明なる言辭を大書せり、

「子なる者よ、爾曹主に在て兩親に順ふべし、是れ正き事なれば也、爾の父母を敬ふべし、約束を加へたる誠は之を首とす、これ爾が福を得また地の上に壽長からん爲なり、父なる者よ、爾曹の子を怒らすこと勿れ、主の警戒と教訓を以て育つべし、僕なる者よ、キリストに服ふが如く畏れ戰き誠の心をもて肉體に屬る主人に服ふべし、人を悦ばする者の如く只眼の前の事を務ると勿れ、キリストの僕の如く心より神の旨を行ふべし、人に事るが如くせず主に事るが如く甘心つかふべし、そは僕なる者にもわれ自主なる者にもわれ、各行ふ所の善に循て主より報を受んことを爾曹知ばなり、主人なる者よ、爾曹も亦此の如く彼等に行ひて厲言を止めよ、蓋かれらと爾曹の主天に在り、彼は偏る所なしと爾曹知ばなり、」

余輩は此の文章に由て實に猶太人が孝道を以て建國の一基礎となしたりしを認めざるを得ず、「爾の父母を敬む」とは、上にも見えたる如く、摩西が猶太人に授けたる十

誠の第五に當る者にして、誠は是れ約束を加へたる第一の誠命——entolee protee en epaggeia, first commandment with promise——なりとす、但し約束とは何ぞや、他なし是れ「是は汝の神エホバの賜ふ所の地に汝の生命を長からしめんが爲なり」(本書六十六頁を參觀せよ)といふ文字を指す也、井上氏は十誠に此等の文字あるを見れば、其何の義なるかを了らず、却つて之を迷信的の言語として度外に置きたり、然れども此の所謂「約束」は保羅が此に特記せる如く、又古今の學者が屢々論及せる如く、寔に此の誠命に大關係を有す、此の「汝の生命を長からしめん」と云ふ文字は單に箇人の生命を指すに非ず、此には主として國民の生命を指す者なることは其上に冠せる文字——「汝の神エホバの汝に賜ふ所の地に」——に照して明らかなりとす、此の地は即ち迦南にして、所謂「乳と蜜の流るゝ」沃土を指せる者なることは、一たび聖書を翻せば直ちに知らるべし、是豈孝道を以て建國の一基礎となせし明證に非ずして何ぞや、然るに此の「汝の生命」云々の文字を以て箇人の生命に止まると説くが如きは皮相の見解にして固より顧みるにも足らず、讀者にして尙會得せざるあらば、請ふ自ら舊約書

申命記第六章一節——四節に就きて其疑團を氷釋せられよ（オエチンメンの社會道徳學四百七十五頁を參觀せよ、彼處にも我が此説と同じく Die Verheissung des langen Lebens habe nur . . . einen Sinn, dass zunachst nicht die einzelne Menschensele, sondern dass Volksganze, die Collectivseele damit gemeint ist 等の著しき文字あるを見る）。

既に是の如くなるが故に舊約書中に孝道を教ふる言語文字多きは自然の事にして、新約書中に於ても亦おのづから然らざるを得ず、保羅の此語及び其他の孝道は皆是れ我が上に引たる基督の辭——「我れ律法と預言書を廢るために來れりと意ふ勿れ、之を廢るために非ず成就せしめん爲めに來れる也」——を證明左驗する者と謂ふべし、然り孝を勸むる文字は唯に基督教に採收せる經典の中に限るに非ずして、又猶太の文學中に徧く散在するを見る也、例へば聖經外の緯書と稱する一群中に列する「シラクの子イエスの智言」てふ奇書の第七章二十七八節に説きて曰く、

「心を盡して爾の父に敬事せよ、爾が母の勛勞を決して忘るゝ勿れ、爾は彼等の生める者なるを深く心に記せよ、彼等が爾のために致せし所の者を爾いかでか報い竭すを得ん」、

論じて此に至れば余輩は今井上氏に教へざるを得ざる一大事を有す、少くとも余は此にて虚心平氣公平無私の江湖識者に之を告げざるを得ず、——「爾の父母を敬へ」といふ彼の誠命の中には亦實に愛國心の萌芽を藏す、抑も愛國心なる者は、フランク氏が美はしくも説ける如く、實は一家を愛するの情よりする自然の結果にして又自然の推廣たるが故に、必然孝悌と親密の關係を有する者とす「エーノンマン、デ、モラル百三十八頁を見よ」、殊に此誠命の中に在ては、孝道を以て國民の生命を長うすべき金液となしたれば、孝道と愛國とは實際眞に兄弟たるに至りし也、此事に關してオエチンゲン博士は説をなして曰く、

「吾人已れの國土を「父」の國（“Vater”—Land）といひ、己れの國語を「母」の語（“Mutter”—Sprache）といふは甚だ味深し、斯の如く父と母とに敬事する人民は其全社會の壽を長うし福を増して、自由の天地に獨立の快樂を享受せんこと必ずし、

是れ決して想像に止まる事に非ず、此の徳本は則ち猶太國に可憐斷腸の花を發き、夫下古今の人々をして頻りに咨嗟永歎せしめ、轉た感賞欣慕せしむ、請ふ試みに舊約書中に就きて詩篇第百三十七篇を讀め、多情多恨の人ならずとも、袖に涙は必ず玉なさん、請ふ其中の數句を吟じ見よ、

「われらベビロンの河のほとりに坐り、シオンを思ひ出で、涙を流しぬ、」

「われら外國アシリアにありて争でエホバの歌をうたはんや、」

「エルサレムよ若し我爾を忘れなば、吾が右の手に其巧を忘れしめよ、若し我なんぢを憶ひ出ずば、吾が舌を頸につかしめよ、」

更に一步を進めて觀察するに、猶太人が救主(メッサシア)の來降を待わびし者は實に此の愛國の赤心、及び獨立の切望に驅られて幾層の熱度を加へたりと謂はざるを得ず、此熱心は基督の降誕に及びて尙衰へざりき、故に基督の弟子は其救主基督が已に死に勝ちたるを見て謂へらく、此出世間の勝利や必ず延きて世間の勝利に至らんと、乃ち問て曰く「主よ今國をイスラエルに還さんとしたまふか」と(使徒行傳第一章第六節を

見よ)、

夫れ孝者徳之本也、君子事親孝故忠可移於君、因て求忠臣必於孝子之門也、猶太人此の孝を以て心としたれば、自然にして天下第一の愛國者となれり、若し彼等をして初より君主を有せしめたらんには、必ず亦世界無二の忠君者となりしならん、然れども彼等は久しく所謂神政制度の下に生活したり、故に彼等は上帝に忠節を竭せり、是れ上帝は彼等のために君たりしを以て也、彼等は上帝に忠義なる事を *emuni*, *emunah* (以上名詞)、*neiman* (形容詞)、*aman* (動詞)等と曰ひ、後ち人王起るに及びて直ちに此等の文字を忠君の義に移し用ひたり、如何にダビデがサウロ王に對して君君たらざりしも善く臣臣たりし乎、如何にサウロ王をして「ダビデよ是は果して汝の聲なるか」といひて大いに悔い哭かしめし乎(撒母耳後書廿四章)、如何に悲歌を作りてサウロの戦死を吊らひつ「イスラエルよ汝の榮耀は汝の崇き邱に殺さる、嗚呼増荒男は仆れたる哉」と國中に歌はしめし乎、——ダビデが天下を一統するに及びて如何に全國人民彼れを王として戴き、子子孫孫ダビデてふ名を欽仰歎賞して永く已まざりし

乎、アベルの哲婦が「我はイスラエルの中の静穩忠義なる府城の一なり」と誓ひて謀叛人の首を斬て投いだせしはダビデ王の生前に於る伊色列人の感情を代表せる者とも謂つべし、

然るを井上氏は曲學者若くは無識者の眞面目を露はして喋々すらく、

「當時ニダヤ國にはヘロツドと稱する王ありたり、然るに耶穌はヘロツド王に對して如何なる忠義をなししか」云々、

而して一概に耶穌を不忠の臣と評し、耶穌教徒を不義の民と罵れり、彼が鐵面皮もまた甚い哉、彼が如きは亦是れ支那の俗語に所謂「牛皮燈籠」にして、到底之を醫するの藥なし、シルンルが「エンクフラウ、フラン、オルンアンス」中に書ける如く、鬼神も之に克つ能はざるを奈何せんや、

“Mit der Drummheit kaempfen Goetter selbst vergebens.”

前に言へる如く、孝は愛國と兄弟たり、愛國は忠君と従兄弟たり、是を以て眞に父母に孝なる人にして其國を賣り若くは其君に叛きし者は古來殆んど未だ有らざる也、猶

太は藪爾たる小國なりし故に、古よりして屢々四隣の強敵に侵されたり、猶太の補氏とも稱すへきマカビー (Maccabees) 父子兄弟寡兵を以て幾度か叙亞里の大兵を打敗りしかども、終に羅馬の雄將ポンペイ (Pompey) のために猶太國は羅馬の版圖に兼併せられりぬ、是に於て羅馬帝は外國人を派して猶太に王たらしめしが、此王統すなはちヘロツド家にして、代々擅制壓抑を極め、苛政を布き刻法を施して猶太國民の獨立心を壓滅せんと圖れり、猶太人が(僅少のヘロツド黨を除くの外)斯の如き君王の臣妾たるを甘ぜざりしは固より其處にして、又實に然らざんばあるべからざりし也、エリツド人は一百十有餘年の後に於てすらヒクソッス王(所謂牧羊人王)を仆して外國の轡を脱せり、支那人は一百年の後に於てすら元朝を覆へして獨立を恢復せり、况んやキリスト在世の時は羅馬の併呑を去ること日尙淺くして、猶太人の胸中には不俱戴天之怨あり、有志家の中には膽を嘗め薪に臥す者鮮なからざりしをや、此の猶太人に向ひて羅馬朝廷の代表者たる「匹夫の紂」に阿諛迎合せざるを答むるは、猶ダモスセニスに向ひて其ヒリッソ王を歓迎せざるを責ると何ぞ異ならんや、預讓にむかひて其智伯に臣事

せざるを責ると何ぞ異ならんや、四十七義士に向ひて其吉良家に忠仕せざるを責むる  
 と何ぞ異ならんや、ウヰリソム、テリル (William Tell) に向ひて其グメン (Gessler)  
 に恭従せざるを責ると何ぞ異ならんや、伯夷叔齊は聖王の粟をたも食ふを潔しとせず  
 して首陽山に餓死ても尙聖賢たるを失はず、仁を求めて仁を得たりと孔子に稱歎せら  
 れじに非ずや、況て基督は一時一國の人に非ず、天下萬世の神人にして、人天の師た  
 る者なれば、彼の羅馬皇帝に阿ぬりて王冠を買ひ得たる暴君虐主の如きは、假令其麗  
 千萬なりとも、度外に置きて顧みず、直ちに天下を教化して斯る小人を根本より掃蕩  
 せんことを期せりと余は信ず、其中ヘロッド、アンテパスは正妃を逐ふて己が兄弟の妻  
 ヘロデアスを奪ひたりしが、基督の先驅ヨハチの之を諫争せるを怒り、併せて彼を政  
 治上の煽動者と見做し、其姦婦の請に應じて終に之を獄裏に首斬り、更に進んで耶穌  
 に其不義の刃を向んとせしが、其正妃の父君たる亞拉毗亞王兵を起して彼を攻破り、  
 其結果として彼は遂に他邦に左遷せられりぬ、是の如き怪物をば之を誅戮するをこ  
 そ愛國者とは謂ふべけれ、是れ猶太國の眞君主に非るは上に具さに説けるが如し、當

時猶太國にヘロッド黨てふ者あり、此ヘロッド家に與して己が父母の國を羅馬に奴隸  
 たらしめんと務め、己れが同胞兄弟を羅馬人に臣妾たらしめんと計れり、彼の徒輩基  
 督を進退兩難の險隘に陥られて倒さんと欲し、來りて羅馬に貢賦を納るゝの可否を問  
 ふ、此一段を聖經には實に左の如く記せり、――

「此時パリサイ宗徒出で、如何にしてかイエスを言ひ誤まらせんと相謀り、其弟子  
 とヘロデの黨人を遣はして云はせけるは、師よ爾は眞なる者なり、眞をもて神の道  
 を教ふ、又誰にも偏らざることを我儕は知る、そは貌に由て人を取らざれば也、然  
 れば眞をカイザルに納むるは善きや悪きや爾いかに意ふか我儕に告よ、イエスその  
 惡を知て曰けるは、偽善者よ何ぞ我を試むるや、貢の金を我に見せよ、彼等アナリ  
 一をイエスに持來りしに、之に曰けるは此像と號は誰か、答へてカイザル也といふ、  
 是に於てイエス彼等に曰けるは、然らばカイザルの物はカイザルに歸し、神の物は  
 神に歸すべし、彼等之をきき、奇としてイエスを去ゆけり、云々

實に耶穌の此答はヘロデ黨員が奇とせし如く、唯に眼前の難問題を絶妙に解き得たる

のみならず、又善く基督教の大精神を説き得て、纖毫の遺憾なからしめたる者と謂ふべし、然るを井上氏は却つて頑鈍にも得意然と説きて曰く、

「耶穌の愛國心に乏しかりしは……其税を羅馬政府に納むべしと冷淡なる返答を爲ししによりて明瞭なり、……單に税を羅馬政府に納むべしと云ひたるは果して忠君の主義と見做すべき者なるか」云々

嗟盲蛇物に怖ぢず、蟬蛸にして巨鯨を論じ、自笈にして大椿を料る、焉んぞ短見淺慮ならざるを得んや、深遠高妙の問題は逆も彼が才能の及ぶ所に非れば、余輩は此に只三歳の兒童も解し得べき疑問を討究せん耳、井上氏は此にも又自殺的に彼の賣國奴輩——即ちヘロデ黨人——を愛國忠君の義士と認めたり、蓋し聞く志合する者は山海を以て遠しと爲さず古今を以て隔となさずと、井上氏は寔にヘロッド黨人の志を欽羨す、然らずんば此賣國奴輩を安んぞ愛國忠君の義士と認むるを得んや、

論じて此に至れば余輩は其今まで忍びて言はざりし所の事を明言せざるを得ず、井上氏は自ら其信せざる所を陽に信すと言ひ、其尊とばざる所を伴りて尊とぶと言ふ也、

彼其教育宗敎衝突論第八九頁(及び教育時論二百七十九號)に自ら明記して曰く、

「我邦は古來神道の敎ありて、神の多きと實に千萬を以て數ふ、然るに其最大の神たる天照太神は實に皇室の祖先なりと稱す、然かのみならず、歴代の天皇は皆亦神として尊崇せらる、然かのみならず倫理に關する敎も皇祖皇宗の遺訓と見做さる、是れ現に我邦の國體の存する所とするなり」云々

基督曰く「夫心に充るより口に言はる、善き人は心の善き庫より善き物を出し、惡き人は心の惡き庫より惡き物を出す」と、孔子曰く、視其所以、觀其所由、察其所安、人焉廋哉人焉廋哉と、井上氏は全力を盡して其所謂「我が國體」の爲に論辯攻撃を逞しうする途中誰らず知らず其中心の信念を口はしり、計らずも假面を脱して其正躰を露はしたり、數日前の日本新聞に某氏書を投じて大いに井上哲次郎氏の巧言を指摘して曰く、久米邦武氏は直言によりて罪を獲、井上哲次郎氏は婉語によりて罪を免かると、即ち説破して曰く、此文章中に於ける「實に皇室の祖先なりと稱す」、及び「皇祖皇宗の遺訓と見做さる」は、俱に是れ井上氏が此事を信せざるを隱約の間に表示せる者なり

と、殊に日本新聞の紙上に於て此事を説破せるは他に比して幾層興味の大なるを覺ゆ、久米氏の事は余これを詳かにせず、然れども井上氏の此暴露たるや凡そ文字を解する人々の皆均しく認むる所にして、今は早や百喙も井上氏のために分疏するを得ざる也、嗟彼は斯の如く其自ら信ぜざる所の事を喋々眞面に主張して、世の端人正士を反對に偽善者と罵りたり、郷愿と嘲りたり(四頁)、然るに今や斯の如き確證あるが故に、世人此等の悪名を井上氏に禁むらすとも彼豈之を辭するを得んや、嗟彼は人を經らんとする繩を以て自ら經られたり、人を刺さんとする刃を以て自ら貫ぬかれたり、斯の如くにして彼尙ほ大學に教授たるを得ば、嗟我が大學の名譽を奈何せんや、視よ五月九日の國會新聞は左の大膽なる斷案を下して大に世間を驚かせたり、――

「教育と宗教の衝突――何ぞ辯駁することをか要せん、唯だ由て以て大學教授、評議官、博士の實力を判知し得せしめたることを謝すべき而已」

余輩は恐る此痛切なる評語或は吾人が敬服する他の大學教授諸氏に玉石混淆して均しく及ばんことを、――是非曲直は兎まれ角まれ衷心より信じて論ずる所は幾分か觀る

べき者なきに非れども、斯の如く自ら信ぜずして舌端のみを勞らかする議論は三文の値もあること無し、嗚呼其哲學者の精神なきこと何ぞ其斯の如く甚きや、

諸余輩は孝道を論ずるに當りて斯く其兄弟たる愛國、及び從兄弟たる忠君にも既に論及し了りぬ、此上は只井上氏が基督の一身上に加へたる攻撃を一瞥するを要する耳、彼また例のナン――彼が唯一の郷導――の臆想に誤まられて口眞似して曰く、「家族は彼を愛せざりしと見ゆ、彼もまた家族に對して冷淡なりしを見る」と、ナン此語につきて彼は自ら更に敷衍して曰く「耶穌は幼少の時より親權に反して家業を打棄てたり」と、而して種々半解の經句を引ききて耶穌の不孝を證明せんと試みたり、然れども上にも言へる如く彼は常識(コンモンセンス)だも無きが上に、聖書の新百來文及希臘文を領會し得ざる盲漢なれば、其引援せる所は皆失當にして、日曜學校の生徒すらも彼が蒙を啓き誤を正すに餘りある程なれば、國會新聞が余輩に教へたる如く實に之を眞面目に辨駁するも大人氣なし、只一二彼に注意するあらん耳、汝は何處より彼の「親權に反し」てふ語を搜し來りしや、汝大工の子は必ず大工に一生を終らざるべか



らずと思ふや、孔子も立身行道揚名於後世、以顯父母、孝之終也と説けるにあらざ  
 や、汝の此の窮屈なる孝道——偽孝——は何處より出しぞや、汝秀吉は畢生農夫たら  
 ざるべからずと言ふか、釋迦は一生世間の王たらざるべからずと言ふか、ルーツルは  
 生涯抗夫たらざるべからずと言ふか、愚も亦甚しい哉、耶穌は人天の師たるべき天職  
 を有せり、其終生工匠たらざりしは固より宜しく然るべき事のみ、耶穌は斯く其天職  
 を盡すに銳意熱衷したれども、初中後未だ曾て一度も「親權に反す」といふが如き不徳  
 を故らに演ぜざりき、路加福音書第二章第五十一節に云く、「イエス其父母と共に下り  
 ナザンに歸りて彼等に從ひをれり」(een huypotassomenos autois)と、又イエスは此世  
 を去るに臨みて、其愛する弟子ヨハネを母マリアに指さして曰く「是れ爾の子なり」と、  
 又ヨハネに言ひけるは「是れ爾の母なり」と、斯の如くマリアの孝養を弟子に托しけれ  
 ば、「其弟子すなはちマリアを己が家に導けり」(約翰福音書十九の二十六七)、是等の  
 事は井上氏が見れども視ざる所なれば僅かに論及する而已、其詳細は縷説するに暇あ  
 らざる也、

エマールソン曰く、「エウクリッド及びプラトラスを讀みたらば汝が幾何學上に吐露する意  
 見は多少の重みあらん、然ずんば汝は口を開くべき權なき也、斯の如く懷疑家或は頑  
 信者ありて智力上若くは道德上の問題に口を出さんとせば、我輩は先づ其人に問んと  
 す汝はプラトの典籍を熟讀したるやと、是れ其人が提起する淺薄なる異論の如きは既  
 に悉く該書籍中に辨破駁倒して餘蘊なきを以て也、若し未だプラトを讀まずとせば、  
 其人の異論は聞くに足らず、請ふ先づ往きてプラトに學ぶ所あれ」と、  
 余輩も井上氏に告て曰んとす、「汝口を開けば頻りにレナン、レナンと言ふ、然れども  
 レナンの性質は前に説き聞かせたるが如し、基督の傳には、レナンに倍從せる大著述、  
 例へばキイト(Keim)、ウナイク(Weiss)、ペンサンク(Pressnue)、ラング(Lange)、  
 ナアンダ(Neander)、エワルト(Ewald)、ストラウス、フナラル、ガイキ、エマール  
 シヤイン等甚だ多し、先づ少くとも此等を熟讀して來れ、然らば汝の言ふ所に幾分の  
 値生ぜん歟」余は確信すレナンといふとも井上氏若し眼を開きて虚心に之を讀まば、  
 決して彼をして斯の如き胡說謔語に奔らしむる者に非らず、ダルクワソンの著書が却て

有力なる自然神學 (Natural theology) となりし如く、ベナム (Benam) の耶穌傳もまた或る點に於ては基督教のためには有功なる頌徳文となりぬ、彼の第二十七章の如きは基督教及び耶穌の天下に冠たる功徳を世界萬國に雄大の文字を以て宣傳する者に非ずして何ぞや、ベナム曰く、「己れの醫咳に接する人々をして深く己れを愛せしめ、死後も生前に異ならずして永く愛せしめたる事、是れイエスの大功業にして、當時の人衆が見て最も驚歎せし所なり」と、其何に由て斯の如くなりしは問はずして知るべし (附録第六を見よ)、彼の 大カイム も亦説きて曰く、「耶穌が公私の生活の聖潔なりしを見れば、其の少年の日に於ける高尙遠大の希圖及努力も察するに餘りありとす」と、之を要するに井上哲次郎氏が執持せる論法は徹頭徹尾 ベナム が「新論法」 Novum Organum に所謂「精神の逆料」— Anticipatio mentis — にして、否な更に是よりも甚だ悪き者にして、彼に哲學者たる軀面を傷つけしめたることを實に極めて大いなりと謂ふべし、

(註) シヨセフラス語を引ける者、

(「悔悟の哲學者」已に親を重ねることを四回、而して毎回甚だ長がり、然るも尙惡戯を辱うしたるは器外の垂りに

して、余は深く國民之友の愛讀者諸君に感謝せざるを得ず、「教育と宗教の衝突」は紙數百五十餘頁に達する者なれば、一々に之を辨駁せんとせば、少くも彼に三倍する長文を書かざるを得ず、是れ豈余輩が雜誌上にて爲すを得べき者ならんや、故に余は此に本評を結ばんことを欲す、是れ已に井上氏の本城を抜きたりし信するが故に諸餘の外若別堡の如きは攻めずして自ら倒るべければ也、余が此評論に着手したるは全く學者の末に列なる者として眞理の爲に戦はんとしたる也、何れの宗教又は宗派をも代表して之を爲したるに非ず、是れ我は宗教に衣食する者に非ば也、故に其論する所に公平を主とし、局外者の目を以て之を判斷せり、既に此の如くなるを以て本評中には直接に佛教を是非することをせず、是等のうちから別問題に屬すれば也、

余は元來直情徑行の野人にして文辭に嫻はず、婉曲の文字を以て世に媚るを能くせず、都雅の辭句を以て都人士を悦ばすを得ず、故に都雅の君子中には余が用語を時に或は過激とみまむる者もあらんや、然れども概して此の如き人々は未だ井上氏の議論を自ら讀まざる者也、若し之を讀たらんには決して斯る感情を懷く能はず、恐らくは尙吾が辭の軟弱なるを憾まん、無證據に、獨斷に人を不忠不孝不義と宣告す、是豈小なる事ならんや、不忠不孝不義は天地の容れざる大惡徳なり、之を以て誣ひられて尙も義怒を發せざるは凡夫なる余輩の能はざる所なり、況んや唯に自家の名譽を汚されたるのみならず、學者として世間の爲めに眞理を辨明すべき義務ある者にあつてをや、—— 然のみならず既に稱して論駁を曰ひ又は筆戦を曰ふ、請ふ戦法を以て呼へん、敵クルツノ砲を連發し來るに我豈舊式のハンバルト砲を以て當るべけんや、少くともアームストロング砲位は用ひざる可らず、彼若しスナイデル銃を以て迫らば、我はヘンリマルチニ銃を以て撃たざるを得ず、豈火細銃の能く爲す所ならんや、故に余が此の攻守法に異議ある人々は、已が名譽若くは體面(オノル)の何たるを辨へざる者

に非れば則ち机上の空論家たらん耳、江湖具眼の識者は余をして十分に嘖はしめん、汝濫りに刃を抜く勿れ、既に抜きたらば男兒の如くなれ。

以上破顯し來りたる所にて既に忠孝愛國等に關する基督教の主義及び精神の一斑は明らかなるべし、基督教の道德に關して井上氏が懷きたる見解は皆皮相若くは虛妄にして、斯の如く既に駁倒せられ畢りぬ、而して彼が佛教の爲に其所謂忠孝等を經論に就きて喋々する所は、極めて盲然不精 (unethical) にして、此の批評的なる世界の人物が爲すを敢てせざるが如き種類の者なれば、一顧を與ふるにも足らず (是れ善惡無差別が佛教の眞面目たる事を忘れたるなれば也)、且又余輩の目的とする所にさのみ關係なき者なれば此には措て問はざる可し、唯左の事を一言せんとす、——井上氏は斯の如く佛教の爲めに大に盡すあらんと務めたり、然れども彼れ其論を教育と基督教の衝突と題すべかりしを誤て「教育と宗教の衝突」と題せし故に、基督教を排撃するの餘り公平を裝ふため遂に勢ひ佛教をも排撃せざるを得ざるに至れり、其説に曰く、——「佛教の始めて日本に入る時は佛教に匹敵すべき哲理的の宗教は勿論之なく、漢學は

之あるも未だ盛んに起らず、是を以て高妙の哲理を好む者出世間的思想ある者、無常の觀念ある者等之を喜び、佛教は曠々乎として東漸せり」(百卅四頁)、云々  
佛教が我國に始めて行なはるゝに至りしは、其中に高妙の哲理ありしに因るに非ず、歴史を按ずるに、「此法能生無量無邊福德果報、乃至成辨無上菩提、譬如人懷隨意寶、逐所須用盡依情、此妙寶亦復然、祈願依情無所乏」といふ觀念よりせし者なること争ふべからざれば、井上氏の此説は架空の妄説なれども、暫く之を事實と許すとも、是れ畢竟佛教が本來の徳に由るに非ずして僅かに烏なき里の蝙蝠として我國に僥倖にも傳はれりと言ふに外ならず、佛教の爲にも有難からぬ讃詞にあらずや、彼また説を進めて曰く、  
「宗教は俗人の哲學、哲學盛なれば宗教衰ふ、宗教盛なれば哲學衰ふ、哲學と宗教とは兩立し難し」云々  
是豈韓非子の所謂矛と楯とを賣る人の呼聲に彷彿たる者ならずや、宗教豈獨り基督教のみならずや、

然れども彼が本意は、一に基督教を倒さんとするに在りとす、故に百方攻撃を逞うすと雖も、一も肯綮に中る者ある無し、例へば「耶穌教が時勢に従ひて屢變遷するは抑も何の爲ぞや」(三十六頁及び其他)など言ひ詰りて、該教が生存競争のために然か派別する者の如くに論ず、然れども此の如きは第一に歴史の何物たるを知らざる者の言たる耳、亞米利加歸化の獨逸人シヤフ(Schaff)其大著たる教會史中に明言して曰く、宗教は其生命ある間は分派せざるを得ずと、試みに思へ佛教の八宗十二宗は如何なる時代に起りしや、佛教の活氣旺盛なりし時に起りしに非ずや、故に耶穌教の尙分派して止まざるは、之が衰滅の徴候に非ずして、却つて之が隆盛の徴候とこそ謂ふべけれ、請ふ目を洗ふて更に歴史を一讀せよ、必ず赧然として曉る所あらん、  
彼また道德と宗教とを混同して曰く、

「歐米の倫理學者は漸々耶穌教を離れて別に倫理學を立てんとす、英國のヘンタム、ミル、ペーシ、スペンサー、獨逸のウント、ギズチキ、デューリッング、丁麻克のオフェチング、米國のソルター、コイト諸氏皆耶穌教を以て倫理の基礎とせざる

也」云々(三十七頁)

宗教と道德とは密接の關係あれども、其名の異なるが如く其物もまた異なり、耶穌教を故らに離るゝに及ばず、世の道德學者にして殊に基督教の道德を講ぜんを欲する者は、其の書の特名けて基督教道德學——Christian Ethics, Christliche Ethik——といふことは井上氏も必ず知るならん、既に之を知らば此の非理の辭は何のために吐きたる者ぞや、基督教を「中傷」せんが爲に言へるか、何ぞ思はざるの甚きや、但し耶穌教を以て倫理の基礎とせざる云々に至りては恐らくは一言するを要せん、「ギズチキ」は伯林大學の倫理學教授にして余の親交の友なり」(五十九頁)と井上博士自ら誇言すれば、此人の事は姑く措きて、此に聊か米人ソルター(Salter)の事を論ぜん、彼は「基督教の將來」と題して、近頃ニッ、ウチー、ルド雜誌上に論じて曰く、

基督教會は時の智力的精神に自由運動の餘地を與ふるを要す、……道德の方面に於て要する進歩につきては余は敢て言んとす、人は或は退歩と思ふならんを雖も、道徳上より之を言へば、基督教に於て第二に爲すべき事は耶穌に歸るに在りとす、

但し今日に在て基督が一千八百年前に思ひし如く思へどは如何なる事ぞや、他なし是れ今日までの舊天地を以て終極なる者と爲さず、百事圓滿の域に達すべき新天地を望みて匪勉努力するに在りとす、されば我は再言す、耶穌に歸れよ、耶穌の大理想に歸れよ、Back to Jesus, then, I say, back to His great ideal! (附録第六參看)

井上哲次郎氏は如何なる弊風陋俗にても現に行なはれざる者は悉く之を保存せんとするなれば、固より此の如き改良進歩——社會唯一無二の要具——を悦ぶべき謂れ無し、例へば彼は男尊女卑を美風として維持せんと欲して實に左の如く説けるあり(百卅二頁)。

「耶穌教に據れば神の下にありては人類は一切平等にして男女も尊卑の別あるとなし、要するに、社會平等主義なり、然るに日本支那にては古來男尊女卑の風俗を有し、學者も亦之れを唱道せり、我邦男尊女卑の古俗は陰陽二神に關する神話によりて之れを證すべく、又支那にては易の繫辭に「天尊地卑、乾坤定矣」云々「乾道成男、坤道成女」とありて男尊女卑は孔子の唱道する所に係る、……」

然るに佛教にも亦男尊女卑の教あり、釋迦は本と一切平等の教を立て、婆羅門、刹利、毘舍、首陀の四姓の別を殄滅するを試みたりと雖も、男女を以て同等とせしにあらず、即ち其比丘比丘尼を區別して比丘尼を以て比丘より劣等なるものとせしが如き是なり、……佛教にありては戒律の數、男は二百五十戒、女は五百戒にて其數倍加せり、是れ豈に男女を同等と見做ものならんや、云々

然るに實は勝鬘夫人が速に法を解して授記せられしと云ふ如く古代の佛者も井上氏よりは遙かに進みて彼の女卑の陋風を排斥したる也、政治家にして此の如き説をなすならば幾分か恕すべきも、哲學者にして之を眞面目に唱ふるは、其道を辱かしむる者と謂ふべし、

此の如く井上氏の縷々説き去り説き來る所は一として正鵠に中れる者なし、彼れルーソーが徒の後に從ひて再三再四主張して曰く、基督敎は一に人を出世間化して社會の事務を抛擲せしめ國家の運轉を缺損せしむ、例へば

「若し十官兵隊にして深く耶穌敎を信せば敵に向ひて發砲することの是非を疑がふ

に至らん」(百六十四頁)

と、嗚呼愚癡も亦甚しい哉、請ふ實例を擧て問はん、英國のクロムウェル (Cromwell) は如何なる人ぞや、カアファイルが明快の筆を以て描きし如く、彼は當時の大宗教家なりしに非ずや、軍人にしてシロムウエルの如く善く戦かはし遺憾なかるべし、彼は唯に内亂を容易く裁定せしのみならず、己が祖國の武威を歐洲に耀かしたればなり、米國のワシントンは如何なる人ぞや、萬人が齊しく認むる如く、彼は當時の大宗教家なりしに非ずや、軍人にしてワシントンの如く善く戦かはし遺憾なかるべし、彼は渾身すべて愛國の赤心にして終に亞米利加合衆國を肇造したれば也、井上氏なほ他の例證をきかんと求むるか、我は此多忙の世に斯る著明の事實を汝一人のために傍徴博引して例證するの閑日月を有せず、只左の一事を問はん、英佛獨魯の四國は基督教國なるか佛敎國なるか、邦國にして英佛獨魯の如く善く戦かはし遺憾なかるべし、印度暹羅安南等は佛敎國なるか基督教國なるか、思ふて此に至らば赤面せざらんとするも能はざらん、我が國に基督教の弘まりたればとて決して我が此の勇武なる大和民族は其勇

武を減ずる無く、却つて幾層敢進の氣象を増さんこと實例の之を暗示するあるを奈何せんや、固より兵は凶器なり、濫りに弄すべからず、是唯に基督教の敎ふる所たるのみならず、支那の聖賢も亦屢これを説けり、論語に明記して曰く、

衛靈公問陳於孔子、孔子對曰、桓豆之事則嘗聞之矣、軍旅之事未之學也、明日遂行、井上氏何ぞ儒學もまた邦國を滅亡せしむと主張せざるや、然るを彼は又例の淺薄を街はんとして喋々論じて曰く、

「曾て一個の軍士あり、耶穌に我れ當に何をか爲すべきと問ひたるに、耶穌之れに答へて曰く、「毋強暴於人、毋誣詐於人、以所得之糧足矣」(路加傳第三章第十四節)と、此敎固より善し、然れども殊に軍士に適切なるものにあらざ、單に此敎を守る而已にては、其勇氣は出世間的の觀念の爲めに消失するの恐れなしとせざるなり」云々、

狂愚もまた甚しい哉、醫師は疾患を按じて藥を投ず、實に千人千様なり、要する所は只其病に適中するを貴ぶなり、故に孔子に仁を問ふ者十人なれば孔子之に十様の答を

なせり、俗に釋迦も人を見て法を説くといふに非ずや、兵士に兵法を授くるは將官これを主る、只當時の兵士亂暴にして常に良民を苦しめ、動もすれば劫掠を縱まゝにす、基督乃ち此病に一藥を投ぜし也、余輩が井上氏を評して常職だも無しと言へるは即ち此事なり、余豈人を誣ふる者ならんや、彼は現在に證據を有せざるが故に偏に空漠たる過去に就きて云々し、論理學者の排斥する循環論を得意に喃々す、而して此云々喃々する所も實は自己の心を以て究めたる者に非ず、ルソーに學びたる也、レッキエに習ひたる也、——按ずるに天下に戦争を絶ん事は世上の宗教家及道德家が皆望む所なり、然れども未だ其目的を達する能はず、達する能はざるのみならず、或は善と悪と衝突するより、或は目的善くして手段の悪きが爲に、戦争却つて時に或は多からんとす、故に近世に至りて彼の戦争を非とする一宗派——クエーカー宗始めて起れり、ヒウ、テローン (Hugh Taylor) が其著書モララテ、オツ、チーシヨンの中 (第二十頁) に言へる如く、レッキエも却つて宗教の爲に戦争の益したる事を説けり、然るに井上氏はレッキエの片言隻句を信じて羅馬の滅亡を基督教に歸せんと務む、彼が陳

腐のルソーを盲信するも亦笑ふべし、ルソーが此點に於て其好む所に僻せるは一目に瞭然たり、ルソー其コントラ、ソールシアル (所謂民約論) 第四編第十三章に説きて曰く、

「異教を奉ぜる皇帝の幕下に在ては基督教徒は勇敢なる兵士たりしとは、是れ古代の基督教著述家が一齊に確言する所にして我も之を信ず、然れども是只異教出身の兵士と名譽を競ひて此に至りし者のみ、羅馬皇帝が「たび基督教を信奉するに至りてや此の競争は既に有る無くして、羅馬の勇は去て復還らざらん」(Sous les empereurs païens, les soldats chrétiens étaient braves; tous les auteurs chrétiens l'assurent, et je le crois : etc. etc.)

是豈擅斷きはまる論法に非ずや、基督教出身の兵士は唯に刀を抜くことを辭せざりしのみならず、又善く勇み戦ひし事は、百千のレッキエありて驚を烏に言くらめんとし、ても黒むる能はざる所にして、ルソーも之を信認したり、オリツエンがラルタリアンの説によりて吾人に傳ふるが如く、マールカス、アウレリウス帝の下に假にも後世よ

り「軍隊」と稱せらるゝ基督教兵ありし事は、彼等が己れを迫害する王にも亦兵卒として忠勇なりしを明かにすと謂ふべし、コンスタンティン帝は十字架の旗を以て天下を威服せり、セオドシウス帝も十字架の旗を以て中興の明主と仰がる、ルイジックの悪言は此等の事實を抹殺するに足らず、而して羅馬の滅亡は他に其原因の多く存するあり、否な西帝國が早く滅したるに、東帝國が西洋一千三四百年まで氣息奄々として尙も存立せし者は却て基督教の力の與かれるありと謂はざるを得ず、井上氏が書籍を偏よりて盲信するも甚しい哉、盡く書を信せば書なきに若ず（孟子）、バックルも其開化史中に述べて曰く、「書籍は人類が思想を藏する庫なれば、其中には唯に智なる物あるのみならず又愚なる物も多し、因て書籍より吾人が得る所の利益は書籍其物の何如によるよりは寧ろ之を取捨する判断力の明暗何如による」と、眞に然り、井上氏の如きは此の肝要なる判断力を缺く者とす、

基督教徒が愛國心なくして羅馬の滅亡を來したりとの事につき井上氏が提出し得たる證據は大抵レンツキの歐羅巴道徳史第二卷百四十及四十一頁より得たる者なり、即ち彼

が其著書四十一頁に引きたるタルタリアン及びアウガスチンの語と稱する者も實はレンツキが彼處に註として引用せし者、又百二十一頁に出たるマエロームの話も然りとす、此の如く基督教に友たらざる、言はゞ敵の文書中單に一箇所より悉皆一二行宛の種を借り來りて、之を以て直ちに基督教徒が羅馬滅亡の原因たりしを證明せんと試む、鐵面皮もまた怖ろしい哉、レンツキが彼處に引きてタルタリアン (Tertullianus) を誣ひたる彼の語は何より出しぞや、是れ當時(西洋紀元二三世紀の交)の羅馬人及び異教徒が井上氏の如く口を忠義にかりて基督教徒を不忠不義の罪人と罵りたるを辨駁せんとてタルタリアンが椽大の筆をふるひて書きたる護教論——アポロセチクス——より出たる者ならずや、故にレンツキ及び隨て井上氏はタルタリアンを全く誤解しをる者と謂はざるを得ず、即ちタルタリアンは反對者が基督教徒を井上氏が言ふ如く國家に用なき者と言ひたるを憤然排撃して、實にミルマンが引きたるとほり左の如く明言して偽愛國者輩を叱責せり、云く——

「我等基督教徒は印度の婆羅門或は仙人(チムノヒスト)の如く世を避けて山林の



間に裸處する者に非ず、我等とても造化の賜物は皆之を享受す、口之を節用する耳、我等は汝等の市場を避けず、汝等の浴室を避けず、汝等の店舗を避けず、世間の交に於ては總て汝等と一たり、我等も汝等と同く船を操るあり、兵たるあり、農たるあり、商たるあり、汝等と同じき藝術を習ひ、國家の公役に服事す」、云々 (Neque enim Brachmanae, aut Indorum gymnosophistae sumus, sylvicolae et exules vitae . . . nos vobiscum et militamus, et rusticamur, et mercamur . . .)

此文章中には亦「我等も兵たるあり」と語あり、基督教徒が兵たるを辭せざりしこと明か也、ラルタリオン又基督教徒が臣民としても忠良なることを證明し、偽忠臣輩を嘲て曰く、

「羅馬人は實に皇帝に忠なる者なり、謀叛從來絶て起らず、皇帝の膏血は元老院をも皇宮をも染めたる事絶て無し、然るも尚スローアの地には玉體の腥臭を放ち、ガウルは未だローン河の水を以て膏血の痕を滌ひ去らず、嗟斯の如くなるも汝等は尙忠良と自ら稱するか」

是もとより反語にして彼等の偽忠を責たる也、レンッキイすらも「基督教徒は決して叛くことぞせざりき」(scrupulously adverse to all rebellion, p. 140) とは明記せり、既に是の如くなれば、レンッキイの如く彼が隻句を曲解して自家の證據に供せしは大に不當なる者とす、又井上氏はマエロームが一僧の難行苦行せるを見たりと言ひしを云々すれども、是は所謂山僧(モンク)——一種の隱遁者——にして、尋常の基督教徒にあらず、而して今は早無し、井上氏は此等の區別を知らずして譫語せる耳、最後にアウガマチンの語と稱する者も曲解たるのみならず、彼が之れを書きたる時は羅馬が既にアラリク(Alario)てゴス民族の英將に攻落されたる後なりき、否なアウガマチンは此世にて祖國を滅せられたる人々を慰めん爲に該書——「神の城」——を著はしたる也、井上氏がバックルの所謂「判斷力」をくしてレンッキイを盲信したる結果は斯の如し、豈憫笑すべからずや、彼れ歐羅巴道德史の全部を讀まずして、單に二三箇所を拾ひ讀みせし故に、本評の初に言ひし如く、斯くレンッキイをも誤解しをばりぬ、

然らば羅馬は如何にして亡びしや、曰く種々の原因ありて亡びし也、歐洲の名士にし

て羅馬興亡の原因を究めたる者の中には佛蘭士のモンテスキウ(Montesquieu)を以て率先者とす、彼れ羅馬の由て興りし所以及び由て亡びし所以を細かに究めて其遠因及び近因を多く列擧せしが、基督教は其中に在らず、只言ふ、羅馬の亡ぶるや基督教徒は舊宗教信徒(異教徒)の政略宜しからざりしを責めしが、後者は、其盛時に於て嘗てテヘル河の漲溢及び其他の災變を盡く基督教徒に歸せし如く、其衰時に於ても亦其禍を該新宗教の罪に歸したりと、然るに基督教に敵意ある歴史家輩は、該教の反對家が今日までも尙羅馬人セルサス(Celsus)の糟粕を嘗めて未だ新生面を開く能はざると同じく、羅馬人の此の詭言を金科玉條として永久喃々す、因て彼等の説く所は自語相違にして觀るに足らず、ソッキイが説の不妥當なる事は本論の初に言ひたる所を參觀しなば會得せらるべし、ギボン(Gibbon)も亦此非難を免かれじ、彼曰く、「宗教の大目的は未來の福祉なるが故に、基督教の傳入、——否な少くとも基督教の妄用——は、羅馬帝國の衰亡に幾分か與かる所ありたりと謂ふとも怪しむを須ひざるべき歟」と、是れ即ち羅馬人の詭言の變態のみ、然るにギボン自ら其一頁前に明言して曰く

「僅かに一都府たる者が隆興して天下の大帝國となりたる事は空前の奇觀として哲學者の沈思熟考を値ひす、但し羅馬の滅亡は其過度に大を致したる自然の結果にして人力は到底之を救ふに勝ざりき、其隆盛は衰亡の種を成熟せしめたり、滅亡の原因は征服の廣くなるに隨ひて増し來れり、其人爲の支撐の一たび歲月のため若くは偶然の爲に除かるや、彼の巍大なりし建築は自身の重力にて轟然瓦解せり、其破滅の話は單純にして且明白なる耳、吾人は何故に羅馬帝國は亡びしかと問ふに引かへて却つて其斯くも歳長く存立したりしを怪しまざるを得ざる也」

抑も羅馬は斯の如くにして仆れたり、若し基督教にして幾分か之に與かる所ありとせば、我輩は言はんとは是れ藥劑の如き作用を呈せし也と、病人に藥を與ふれば治すべき部分は早く治し、腐るべき部分は早く腐る、基督教が死病に罹れる羅馬に及ぼせし影響は只是のみ、何を以て然か謂ふや、基督教もし羅馬を仆したりとせば、同時にまた數多の蠻民——今日の歐洲諸國の祖先——を興したる也、是れ羅馬を滅したる所謂蠻民もまた基督教民族なりければ也、之を要するに羅馬の滅亡はナポレオンの滅亡に

彷彿たり、ナポレオン曰く我は兵力を以て此に至りたれば、兵力を以て此地位を保たざるべからずと、羅馬もまた兵力を以て大をなしたれば、兵力を以て自ら維持せざる可らず、此ナポレオンの辭をモンテスキューは數十年前に早くも既に羅馬につきて吐きたるを見る。——“Un empire fondé par les armes a besoin de se soutenir par les armes”——然るに異教徒たる羅馬人は彼等の一大詩人マルシヤルが見證せる如く日に月に腐敗を來し、其必然の結果として文弱に流れ、國家の干城たる貔貅中には多く蠻民中より勇武の兵士を僱役せり、是れ實は敵を以て敵を防ぎし者也、其甚だしきに至りては内亂にまでも外兵を使用せり、斯の如くゲンセリック (Genseric) は四百五十五年羅馬に招かれて終に羅馬を奪ひ且切めたり、モンテスキュー曰く羅馬は其實早くよりして諸蠻族に臣たりし也と、要するに羅馬は真正の國家に非ず、天下を并呑して徒らにヴェルヂルの “Tu regere” を歌へり、羅馬は食傷したり、醫師を丸呑にせし閻魔王の如し、慧眼の識者は夙に羅馬の必滅を預言せり、例へばプロペルチアス (Propertius) は西洋紀元前に已に歌ひて曰く、「我は見る羅馬、傲慢の羅馬が己れの隆運に犧牲となるを、皇天

願はくは我をして僞先知たらしめよ」と、又羅馬の史家タシタス (Tacitus) は其有名な日耳曼誌中に、「嗟羅馬は建國以來六百四十年にして日耳曼人を其牆外に見たり」と曰ひて、獨逸蠻民が遂に羅馬を滅ぼさんことを預言せり(第三十七章)、羅馬の未だ滅亡せざる前に童謡ありて頻りに歌ひて曰く、「傲れる羅馬よ、天の義罰爾に降らん、爾は頸を垂れて土に伏さん」、曰く、「嗚呼羅馬の王よ、爾は紫衣を褫かれ喪服を着て哭かん、鷲を戴ける軍旅の譽は消え亡せん」、諸此類枚舉に暇あらず、而して又實に羅馬の滅亡は天下諸國の幸ひなりとす、羅馬は許多の獨立國を非理に討滅して自ら利し、衆多の亡國を相合して一大帝國を建てたとモンテスキューが其羅馬興亡論第六章に具に描ける如し、而して是れ同帝國一流の學者シセロが隱に其本分論等に非とせし所なり、羅馬の亡びたるは基督教の所爲なりと謂は、天下衆多の亡國が獨立を恢復せしも基督教の所爲なりと謂はざるべからず、是れ彼此ともに基督教國なりければ也、然のみならず羅馬の滅亡せしは固より其處にして、諸國の獨立せしは當然の事なりとす、聖師アウガスティンの弟子にオロシウス (Orosius) と名くる有名の歴



の事にて儲てその内裏と云ふを聞けば更に驚き入つたる次第右の博士は基督教社  
會にて有名なる某々二氏に仲裁を依頼し其二氏は之を諾して高橋氏に向ひ、○○  
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○彼の論文を全國三十三種餘の雜誌に投  
書したるものなり然るに○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○今日君のかの攻撃文を出されては大  
に迷惑なれば願くば見合はせ呉れよと仲裁談判に及びしなりと儲ては見下げ果て  
たる博士の心事實に驚き入たる次第なりシテ又た基督教社會の某々二氏とかゝ其  
取次を爲せりとは情なき話ならずや基督教も斯くまで軟派になりけるよな高橋氏  
若し彼の切格の曲學征伐の論鋒を此儘引込む如きあらば氏も亦同流者たるを免れ  
じ高橋氏たる者必ず磊々として爲す所あるべしと目下世評噴々たりとぞ

(第二) 同五月四日の毎日新聞

高橋五郎氏と井上博士(博士顔色なし) 東洋の哲學大家を以て自ら任ずる文學  
博士井上哲次郎氏一度び教育と宗教の關係を論評し基督教徒を目して不忠不義の

臣民なりと稱せしより基督教界の雄豪勃然色を正して赫怒し爾來論戰數番に涉り  
しが遂に聞識洽博の學者高橋五郎氏の物したる偽哲學者の大僻論なる雄篇の爲め  
博士頓に顔色を失し旗を巻き筆を投じて休戰の公開狀を高橋氏に與ふるに至れり  
此般の事世間に傳播するや人皆な文學界近者の一大騒珍となし博士其後の答論を  
聽かんと欲して未だ其聲なきの時高橋氏は再び悔悟の哲學者なる一篇を國民の友  
に投じて如何にも博士の意氣地なきを冷笑 評論? 訓誨? 罵倒? したり高橋氏の  
篇中に曰く

井上哲次郎博士の議論には少なくとも三期あるを見る、即ち過激の期、溫和の期、必死の期是なり……其  
第一期に在ては、宛がら野猪の突出して土を蹴り氣を吐くが如く、人之を猪武者と言はば首へ、亦小勇の  
觀る可き者なきには非ざりき、其第二期に至りては、遠巡踏踏首鼠兩端、進まんを欲して進む能はず、進  
退維谷まりて只管曖昧糺を事せり、其第三期に至りては即ち恰も手負猪の如く當るを幸ひに人を噛ん  
だとして、必死の苦悶奮闘實に罪だ努むと雖も、早く既に孤城落日の光景を呈して、四面楚歌の悲境に至ら  
ん

(中略)是の如く井上哲次郎氏が立論の基礎を頼みたる者は兩ながら非なり、是れ實に自家の脚を以て歩く  
能はず、自家の眼を以て見る能はず、自家の心を以て思ふ能はず、徒らに猿猴然と摸倣を維れ事としたる

の過に坐す、流石に彼も斯の如き屈氣糧をば堅城鐵壁と頼む能はざりしと見へて、單に演説的にならず又歸納的に議論する所あらんを試みたり、即ち彼は既に哲學者たる目も無く、心も無きを以て、佛敎者より授けられたる若干の所謂「不敬事件」或は「不孝事件」をいさ重々しげに提出し、耶穌敎徒が其敎理と主義の然らしむる所として、不忠不義の大罪人たる事を證驗せんと務めたり、

(中略) 試みに彼等が精神を問へ、汝が如き無主義、無節操なる心の鏡に照して正人君子の心腸を邪推する勿れ云々、

其他縷々の言悉く是れ風霜的痛絶快絶の文字讀去て恰も熱湯を身に灑がるゝの感なくんばならず井上博士にして學者たるの面目を知らば何ぞ手を拱して黙止する事を得ん哉

### (第三) 同五月十六日の國會新聞

悪事と人身攻撃　悪事を爲し、而して悪事を責めらる、則ち人身攻撃の非を訴ふ、人身攻撃亦た冤なりとせざらんや。法律の制裁に先んずるに、社會の制裁を以てするは、開明の賜物として望むべきの事、然して社會の制裁は、主として人

身攻撃に在るなり。己れの爲めに、他の一身を攻撃するは、陋劣謂ふに足らず、然れども邪を破て正を顯はさんが爲めに、時ありて人の行爲に立入るは、何の不可か之あらん、人身攻撃は、上徳に非ざれども、一概に卑劣と稱すべからざるなり。人固より過のあるあり、過て而して改むる、茲に君子を看る、過て而して指摘せられんとを畏るれば、則ち過を飾るに終らんのみ。受け得らるゝだけ人身攻撃を受けて、而して益す進むは頗る妙なりとせざらんや。悪事を爲して、而して人身攻撃の非を駈ふるは、盗人たけぐしの類とし、悪事を爲して、而して人身攻撃の來らざらんことを欲するは、蟲の良すぎる次第とす。

抱負　抱負の大なるは、不可とせず、然れども誇り顔に抱負の大なるを語るは、極めて陋。曰く我にして力を奮へば、事成し易きのみと、曰く我れ多年企圖する所あれども、其の何たるかは、未だ口外するを得ずと、曰く我れ定見の在るあるも、故ありて控へ居るなりと、斯の如きの曰くは、寔に卑むべきものとす。力を

奮ひ得ば、奮ふべし、企圖する所あらば着手すべし、定見の在るあらば、辨ずべし、遠慮するに及ばざるなり、若し機熟せずとならば、爾か言ふことを止むるの優れるに若かざるべし、胸中蓄ふる所なくして、強て何か有りげに吹聴するは、人を欺き、己れを欺くもの、眞に賤蔑すべきの事。

是れ志賀三宅二氏の執筆せらるゝ國會新聞にて再び人身攻撃問題につきて其意見を吐露せる者なり、「社會の制裁は人身攻撃に在り」とは何ぞ其言の奇警にして又道理あるや、「抱負」に論ぜる所は何を評せる者なるかそは知る人ぞ知る、

#### (第四) 同五月十一十二兩日の自由新聞

『教育と宗教の衝突』を讀みて 世評囂々たりし博士井上哲次郎氏の著書『教育と宗教の衝突』愈々出でたり、此書の出づるや尋常に非らず、稍々世間物論の種子となりしものなれば、今これを讀者に紹介するに當りては、少しく其の出版前の事情をも述べざる可からず、是れ蛇足に類するが如きも、其の出版に至る事情

を知らざれば、以て本書の性質を詳にす可からず、且や此學者界の珍事事件をして世論囂々たるに至らしめたるは、元と我が『自由』も與りて責なきに非らず、而して世には妄りに曲説を流布して、過般來『自由』の紙上に現はれし記事は故意に捏造せし無根の事なる如くに言ひ觸らす者あり、世人或は爲めに誤らるゝ者あるも知るべからず、是れ我が紙上の體面を損じ、且事實を誣ゆるの甚しきものにして、今此書を紹介するに當りては勢ひ此事件の顛末を明かにせざる可からず、吾人豈辯を好まんや、實に己を得ざれば也

如何に考ふるも、井上氏の今回の舉動は咄々の怪事と謂はざるを得ず、氏は始め全國中數多の雜誌上に於て教育と宗教の衝突を論出せしが、其の要重もに佛教徒の新聞雜誌杯より引用せる耶蘇教徒の幾個の不敬事件を列擧して、耶蘇教徒を痛撃せるにあり、而して其の説たる、後に氏の自○白○悔○悟○せる如く、多少不確實の引例に基きて妄説を吐きたるにてありければ、此論文は教育界に於ける囂々の一論題となりしが、中にも高橋五郎氏が國民之友第百八十五號より偽哲學者の大僻論





護者たる博士井上哲次郎氏が、亦此舉ありしに至りては、吾人實にその心事の床しきものあるを察し、茲に多く筆するに忍びざらん

序でに一言すべきあり、井上氏は氏が耶蘇教攻撃の論文の未だ完結せざるに高橋氏が堂々たる論文を以て攻撃を始めたるを頻りに卑怯なりと言ふ、去れば高橋氏が論文の未だ完結せざるに之れに休戦を哀求したるは勇膽なりや、元來氏が初め數十種の雜誌上に乗出して耶蘇教徒は不忠不孝なりと囂々焉論出せしや、之を妄なりと信ずる者は必らず非常の迷惑を感じたるべきも、未だ曾て氏に休戦を哀請したる者あるを聞かず、氏が議論の大學教授たる博士の議論として天下公衆を誤らんことを恐れ、高橋氏が堂々と攻撃を始めたるは當然の事ならん、何となれば井上氏は既に宣戦を爲したる者なればなり、故に高橋氏の論駁にして不可ならば氏も堂々之れを論駁して可ならん、何ぞ奇怪の手段を以て休戦を哀求するに及ばん、井上氏果して勇膽なる耶、孰れか卑怯にして孰れか勇膽なる、之れを小學兒童の討論會に持出せば亦一興なるべし

世論の囂々に因りしもの耶非耶、井上氏の議論は實に種々の變化を爲せり、高橋五郎氏之れを評して曰く、慧眼の觀察者の夙に看破せられたらん如く、井上哲次郎博士の議論には少なくとも三期あるを見る、即ち過激の期、温和の期、必死の期是なり、——其第一期に在ては宛がら野猪の突出して土を踏み氣を吐くが如く、人之を猪武者とも言は言へ亦小勇の觀るべき者なきには非ざりき、其第二期に在ては逡巡躊躇首鼠兩端、進まんと欲して進む能はず、退かんと欲して退く能はず、進退維谷まりて、只管曖昧糺稜を事とせり、其第三期に至りては則ち恰も手負猪の如く、當るを幸ひに人を噛んとして、必死の苦戰奮闘實に甚だ努むと雖も、早く既に孤城落日の光景を呈して、四面楚歌の悲境に至らんとす、此第三期は抑々何れの日より始まりしぞや、余輩の所見を以てすれば、是れ即ち去月六日より始まりし也云々、評し得て穿てるを見る、井上氏の新著『教育と宗教の衝突』は即ち此の如き諸期を経て生出したるものなり、而して此の履歷附著書は果して如何なるものなるや、

著者井上氏は先づ曰く、此篇論ずる所は哲學的問題と云ふよりも、寧ろ時事問題と連帶せる歴史的探求と謂ふべきなりと、是れ此問題を堂々哲理上より論ずるを主とせざるを謂ふものにして、敵鋒防避の用意至れりとや言はん、一篇の意氣と外勢とは稍強靱なるか如き觀あるも、本陣は早く既に動き立てるを見るべし、一篇の論旨先づ近事佛教に關係ある新聞雜誌等に喧稱せられたる耶蘇教徒の不敬事件なるもの凡そ八九件を列擧して、此等は耶蘇教の非國家主義より起れる現象なりと做し耶蘇教の經典を引用して其の非國家主義を説き、歐米諸國の富強は必ずしも耶蘇教に因らずと言ひ耶蘇教に忠孝の教なくして教育勅語に反すと論じ耶蘇教の博愛を難じ、結局耶蘇教の主義は我國躰と相容れずと論下したるものなり、就中重きを置けるは耶蘇教の非國家主義にあり、全篇附録を併せて百八十頁餘、之れを細評するは片紙の能くする所に非らずと雖も、著者が曲説偏解を逞ふせるは直に看破するを得ん、著者は實に幾個の不敬事件なるものを列擧せり、縦し之を以てその記載せる如き性質のものとするも、之れを以つて耶蘇教全躰を評定す

べきか、佛教信徒中否佛教僧侶中幾百人の姦淫者敗徳者あるも佛教の本旨は此の如きものと云ふ能はざらん、日本國民中幾千人の盜賊あるも日本國民元來盜賊なるに非らず、數萬の耶蘇教徒中稀に十數に近き不心得者あるも之れを以て直に耶蘇教全躰を難すべきか、况んや彼の不敬事件なるもの卷末に附したる正誤文に依れば全く消滅し去るもの也、且氏の所謂耶蘇教の非國家主義なるもの、必竟耶蘇教の心靈上無形の天國若くは神國と現在の國家を牽強附會して判定したるに外ならず、その經語の解説の如き、全く同教徒の通識に外れて一笑に附すべきものなきに非らず、蓋し耶蘇教徒理想を説くも現在を重んず、彼等が結合力の強大にして、國家の保護存立に身を殉するは自ら任ずる所ならん、之れを以て國家溶解の元素となすは抑々曲説の甚しきものなりとす、學問淵博の井上博士何ぞ此等の事實を識らざることあらん、而して此の如き著書出るが故に妙なる也書中の細點に就ては世間必ず論ずる者あらん、

嗚呼曲説奇も眞箇に身を學問界に委ね、頂天立地不羈獨立、身を以て眞理の

○顯○揚○に○任○ず○る○者○は○徹○塵○も○時○俗○に○投○じ○て○曲○説○を○爲○す○が○如○き○こ○と○な○か○ら○ん、  
 ○巽○に○は○都○  
 ○筑○某○な○る○者○あ○り、○政○治○界○に○曲○論○を○試○み○て○世○の○擯○斥○す○る○所○と○な○り○き、  
 ○今○復○た○教○育○界○  
 ○宗○教○界○に○此○徒○輩○を○見○る、○豈○嘆○す○べ○き○の○現○象○な○ら○ず○と○せ○んや、

(第五) 同五月十二日の國會新聞は「宗教者の起つば今の時

に在り」と標して左の如く記せるあり、

此の宗教教育問題たる、單に井上氏と高橋氏との間の問題にあらず、實に佛教と  
 耶蘇教の盛衰消長に關する一種の宗教問題なり、而も兩教者が乗じて以て自己の  
 勢力を擴張するに屈強の問題なり、耶蘇教者にして果して能く井上氏の説を破碎  
 し其の教法の正しく、勅語の主意と相戾らざるを明かにせんか、其の布教傳道の  
 上に利便を得る將た幾何ぞ、又佛教者に在りても耶蘇教の到底我が國躰と相容れ  
 ざることを證し得て識者の贊同を博せんか、所謂大光普照、滿天下に透徹して、而  
 して外道は打たずして死滅に歸せんのみ、此時に當りて佛教者何ぞ睡眠を貪るの

甚しき、二十餘萬の圓頭緇衣皆既に地獄の滓に墮化し去りて、又精進の念なきか、  
 彼のスタインの説を請賣して佛教の改革説を呼號したる北島道龍は已に死したる  
 か、日蓮の遺鉢を繼承せんとして宗制の改革論を獅子吼したる田中知學は如何、  
 八百八街を驅廻りて佛教の革新を唱道したる水谷仁海は如何、皆退いて既に涅槃  
 に入りたるか、將た又死せずして死せしか、何ぞ初聲の大にして後音の小なる、  
 是れ止觀の旨を得たりとするか、二十餘萬の僧侶中一の五郎の如き者なきか、焉  
 んぞ然らん、今は則ち出顯出世の日なり、再び得易からざるの時機なり請ふ舊て  
 起てよ。

耶蘇教者の起て其の勢力を擴張する、亦た實に此時に在り、吾輩は元來宗教には極  
 めて淡泊なりと雖も、宗教なるもの若し社會の風紀を維持するに必要なりとせば、  
 則ち社會の進歩に伴ふて進歩したる宗教の存在せんことを望まざるを得ず、

是れ國會記者が其國粹保存的關係より井上氏の敗衄を歎じて暗に他の勇將を喚起  
 せんと試みたる文章なり、井上氏が既に敗亡したる事は國會自身の明言せる所あ

るのみならず、全國有名の新報紙皆異口同音に之を明言したること具さに本論に見えたるが如し、今尙其一例を掲げんに、五月廿四日の日々新聞には左の戯文を散録欄内に載せて公然と井上哲次郎氏の敗軍を吊ひ、併せて佛教徒を云々せり、

問

麴町 持寺紋岱 提出

去る十九日福島縣の吾妻山破裂噴火したるは只事と思はれず、何か因縁謂はれあるべし、聞説く散録子は天眼通を得たりと、其謂れを説示せ、如何に

(答)坊主臭き名前だけ一風變つた問ひぶりかな、イア我拂子にてみぬ(胸)の疑烟をばらひ呉む、抑も頃日教育界と宗教界との一大論戦といッバ井上哲二郎氏が耶蘇教に加へし非難に起因し耶蘇教徒の熱心なる逆撃軍と數回激戦の末高橋五郎氏が鋭どき攻撃に流石の井上氏逡巡の色を顯はし旗を捲て何れへか落失せたり、此一事耶蘇教徒に取て非常の愉快なると同時に佛教家に取ては此上なき耻辱なれば我れ馳向ふて佛敵原を蹴散さんと勇み立つほどの佛教家あるならんと思ひの外、其後は印度派いづれも口を噤みクツの音を出さず此に於て諸佛諸菩

薩悲憤の涙を垂したまひ一同協議ありけるが如何にも言甲斐なき味方の振舞捨置ては宗法衰頹の基とならん古名僧の内誰にても髮婆の僧侶を勵ますやう計ひ候得との佛託を畏み一個の高僧法力を以て此度噴火の地變を現はしたる次第で御座る、其高僧とは即ち弘法大師の空海上人なり、見られよ破裂噴火の場所は吾妻山と言觸せども實は一切經山の凹所たると實地探檢者の報知に依て明かなり、此凹所こそ其昔弘法大師が一切經を埋め置れしところにして吾妻山の名を得るも此に因るなり、蓋し大師が修法にて經坑破裂し立昇りたる毒焰は半空に沖りて四方に飛散し一百八の耶阿床星、宵耶星となり遂に日本國中にふてしき魔僧を生じ耶蘇教派と合戦に及ぶと云ふ條は今より廿年の後と未來記に現はれ居ること不思議なれ、南無阿彌陀佛くく

## (第六)

版權  
所有

明治二十六年六月十五日印刷  
 明治二十六年六月十八日發行

(定價金拾五錢)

發行者 垣田純朗  
 東京市京橋區日吉町七番地

印刷者 島連太郎  
 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

印刷所 秀英舍  
 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

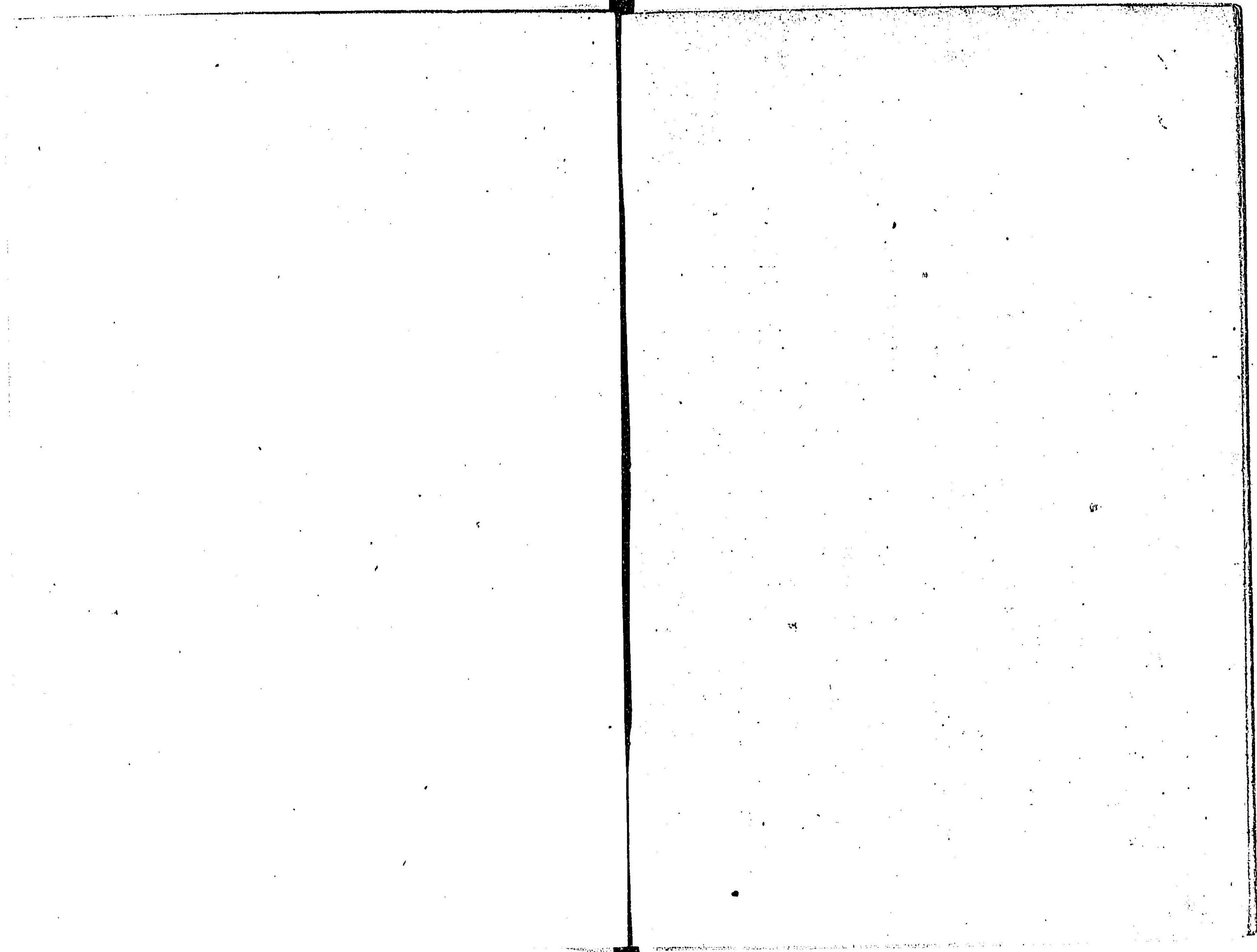
發行所 民友社  
 東京市京橋區日吉町四番地

“Life of Jesus,” Chap. xxviii. Renan.

Jesus was not a founder of dogmas, or a deviser of symbols; he introduced into the world a new spirit.....

It will now be understood why, by an exceptional destiny, pure Christianity still presents, after eighteen centuries, the character of a universal and eternal religion. *In truth it is because the religion of Jesus is, in some respects, the final religion.....* To renew itself it has only to return to the Gospel..... He was the first to proclaim the sovereignty of the mind; the first to say “My Kingdom is not of this world.” *The foundation of true religion is verily his work.* Since him it only remains to fructify and develop it.

“Christianity” has thus become almost synonymous with “religion.” Jesus founded the religion of humanity..... Before Jesus religion had passed through many revolutions; since Jesus it has achieved great conquests; yet we have not a whit advanced; nor can we go beyond the essential principle Jesus created; he fixed for ever the idea of pure worship. The religion of Jesus in this sense is not limited..... *Jesus has founded absolute religion..... His creeds are not fixed dogmas, but ideas susceptible of indefinite interpretation.*



70
93

1911



70  
93

201942-000-5

70-93

排偽哲学論

高橋 五郎/著

M26.6

EDA-0288



70
93